銅鋺の型式，系譜と模倣土器をめぐる問題

The Study on the Type, Genealogy, and Imitation Earthenware of the Copper Bowls

吉岡康暢

YOSHIOKA Yasunobu

はじめに

❶銅鋺研究の論点

❷型式分類と編年

❸銅鋺をめぐる問題

【論文要旨】

（1）銅鋺の型式分類と編年は，毛利光俊彦・桃崎祐輔によって大綱が確立されている。本稿は，古代前期の食器制を特徴づける金属器示向の原点とされてきた銅鋺の器形・加飾による分類・編年の再構成を意図する。そのため，まず全国の事例を悉皆的に収集し，法量分化と各部位の指数化によるデータの客観性を高めようとした。また，銅鋺の初現年代と系譜の検討を通して，銅鋺の史的意義に迫る予備的作業を行った。

銅鋺は 10 類に分類したが，大半は倭国独自のＡⅠ・Ⅱ類高脚・台脚杯と，韓半島の食器で一般的なＢⅠ類高足鋺，Ｃ・Ｄ類無蓋無台鋺が占める。これらは，基本的に酒杯＋飯鋺に陶製の酒瓶の宴器セットを表徴し，倭王権の外交権を示威する威信財と考える。酒杯・飯鋺は配付する首長による格付けがあり，7 世紀中葉（大化）前後で器形・加飾が大きく変化し，配布対象も下位層に及ぶ。

（2）銅鋺をモデルに各地で模倣土器が作られ，金属器示向が普及する。型式は一見多様だが，大阪・陶邑窯で定型化された情報が地方窯へ一元的に伝達されるシステムの存在が想定される。銅鋺同様ＡⅠ・Ⅱ類，ＢⅠ類タイプが 7 世紀中ころ消失するので，銅鋺に準ずる食器の階層化を意図したとみられる。

（3）銅鋺の理化学分析（鉛同位体，蛍光Ｘ線分析）の成果と論点を要約した。課題が多いが，韓半島の銅・鉛原料に一部中国の原料を移入し，7 世紀代を通して国産品が生産，配布されたと推測する。

【キーワード】金属器志向，簡易な型式分類，宴器の威信財，大化改新，摸倣土器

❶……銅鋺研究の論点

古墳出土銅鋺は，早く大森信英が卒業論文（筆者未読）で全国の古墳出土31例の地名表［小出1950・付表］を作製した。ついで小田富士雄が追補分を含め62例を集成するとともに，Ⅳ類9種の型式を設定し，韓半島[(1)]との関係を視野に入れ，倭国の銅鋺の系譜を探った［小田1979，初出1975］。そして，周知のように毛利光俊彦の一連の論考［1978・91，2004・05］による本格的な研究が進展，集大成された。

ただ毛利光の地名表での集成71例［1978］は，40年余を経た筆者の集計134例で略倍増したとはいえ，同時代の古墳出土の各種副葬品，たとえば銅鋺との伴出が46％にのぼる飾大刀のおよそ六～七分の一にとどまることは，銅鋺の資料性，歴史的特性を示す第一の留意点といえよう。第二の特性は，銅鋺出土古墳の存続年代が，半島列国と倭国ないし在地有力首長間の交渉でもたらされた一部舶載品を除くと，6世紀末（陶邑窯TK43期[(2)]）～8世紀初の略1世紀に限られることである。第三に，出土古墳の分布が当初からいわれたように，東海道遠江，東山道信濃以東の「東国」［荒井1994］に偏在し，筆者集計でも毛利光と同じ全体の約70％を占める。

ところで，第2・3の特性に関わるが，銅鋺が古墳に副葬された約1世紀の始まりは600年前後，列島で3世紀後半以来の政治表徴とされてきた前方後円墳の「時代」ないし前方後円墳「体制」［近藤1983，都出1991］が終焉し，東国でも有力墳は畿内の王族・群臣墓に倣い，方・円墳，多角形墳を採用するが，それまでの6世紀代には関東で100ｍ級の大形首長墳が築造された特異な地域性が認められる［白石1992］。一方群集墳は，大勢として西国より半世紀ほど遅れ7世紀前半に盛期を迎え，7世紀後半を通して終末期古墳の時代が続く。

7世紀は，文献史では倭国は「任那官家」（金官加耶）の滅亡（562年）後も「東夷の小帝国」［石母田1973・320頁］として東アジア外交に臨み，集権国家を示向する推古朝前後の政権（崇峻・推古－舒明）から，乙巳の変を経た改新後の政権（孝徳・皇極＝斉明－天智－天武・持統）による「天下立評」と編戸を軸とする国政改革が段階的に進められ，白村江の敗戦（663年），壬申の乱（672年）を経て大宝律令（701年）に表徴される律令国家が確立し，平城遷都（710年）に至る1世紀となる。これまでの銅鋺研究は，もっぱら7世紀前半代との関係で論じられてきたが，後述するように銅鋺は7世紀前半代と後半代では器種組成，型式，分布域が大きく変化しており，しかも全体のおよそ56％が後半代の新式鋺という集計をえている。さきの銅鋺の特性と合わせ，大化の国制改革の前後で銅鋺の歴史性がどう変容，存続するかという新たな視点が必要である。

さて，銅鋺をめぐる課題は多岐にわたるが，おおづかみに二つの論点にまとめられる。一つは，銅鋺と古代の食器制との関わりである。西弘海は7世紀初頭（飛鳥Ⅰ期[(3)]）に始まる宮都の供膳食器（研磨・暗文土師器杯C・A＋須恵器杯G）の変革を，半島の銅鋺をモデルとする「金属器示向」に求め，古代前期（7～9世紀前半）を通して展開するいわゆる「律令的土器様式」の起点とした［西1978・82］。その成果をふまえて毛利光は，当初銅鋺を仏器とし，仏教の興隆を象徴する威信財として古墳に副葬されたとした［1978］が，のちに7世紀前半から銅鋺の副葬が増えるので，豪族層に実用の食器としてかなり使用されていたと修正している［1991］。古墳に銅鋺の副葬が始まる段

階に，畿内の王族などに金属食器が使用されるようになったことは想定されるものの，宮都での銅鋺の出土数は，藤原宮域３点，京域で２点にとどまる［諫早・降幡 2015・16］。ただし，文献史料では，８世紀前半には典鋳司配下の鋳（銅）工による一定の量産段階に入り，養老６（772）年元明天皇一周忌のさいに，京と畿内の寺院に「銅鋺一百六十八」（『続日本紀』同年 11 月丙戌条）を下賜しており，銅鋺が仏事の供養具として定着したことがうかがえる。

つぎに，倭国の銅鋺の系譜について西・毛利光は，半島列国を想定したのに対し，桃崎祐輔は隋帝国の出現（581 年）およびそれと半島三国の冊封外交を契機に，冊封を受けなかった倭国も東アジアの外交儀礼の規範となる隋の「賓礼」を導入すべく，饗宴作法の一環として銅鋺が受容されたとする創見を示した［桃崎 2017］。これに対し，半島の銅鋺の基準となる慶州市皇龍寺・四天王寺の関係資料を精査した諫早直人は，５世紀後半～６世紀前半の加耶領域の古墳出土銅鋺が倭国と酷似するとし，加耶とその型式を継承した新羅にほぼ特定できるとして，桃崎説を批判した［諫早 2021］。諫早の見解は理化学分析データも援用し具体性があり有力な説だが，メイン器種でない無台鋺との比較が主なので，半島の６世紀後半の資料が少ないこともあり，銅鋺の初現年代と背景はなお検証を要する。また，隋の賓礼を導入したとすると，７世紀前半前後の日羅交渉をはじめ東アジアの外交・交流の実態の検討も必要となろう。

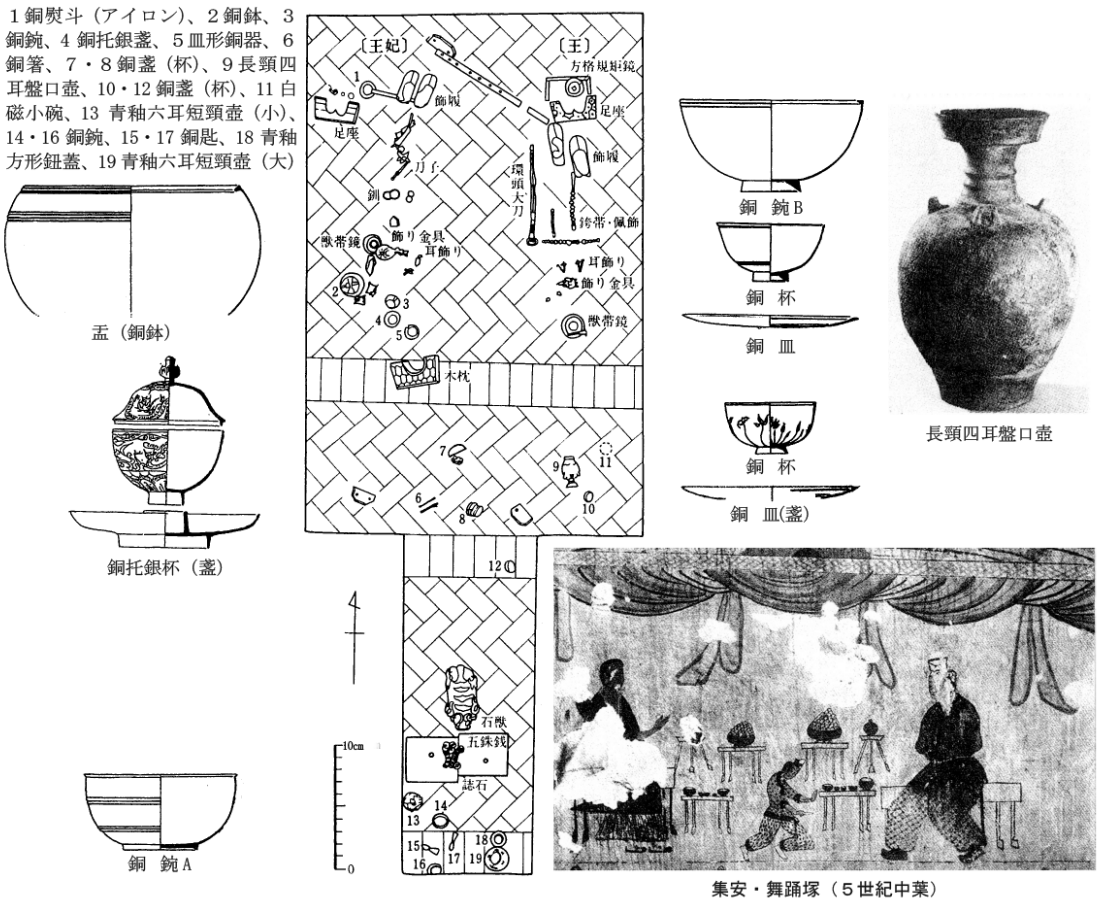


図１　百済・武寧王陵の副葬品と高句麗壁画の食事場面（東・田中 1989 より作製，加筆）

ここで，私見の骨子となる銅鋺の器種組成を知る，東アジア王墓の食器組成の代表例として百済・武寧王陵（王523年没・526年葬，妬526年没・529年葬）［韓国文化財管理局1973，東・田中1989］をみよう。武寧王陵に副葬された食器は，3グループに分けて供献されており（図1），①王妃の前頭（木枕）近くに，銅托銀盞（承盤付銀製有蓋台杯）＝酒杯，飯器とみられる銅鋺（台鋺）と銅皿（托），盂（匙を伴う水容器），②玄門の内側に，白磁小碗，銅鋺と長頸四耳盤口壺，箸1組，③羨門の内側中央に墓室守護の石獣と国王夫妻の墓誌石に五銖銭を一塊盛り，前面に匙を添えた1組の銅鋺と青磁および大・小の青釉六耳壺が納置されている。

この食器一式のすべてを国王夫妻の遺愛品と即断できないが，台杯（酒器）＋台鋺（2種，飯器）＋陶製長胴壺（各種の酒瓶）＋匙・箸セットが基本で，匙・箸は伴わないが倭国の初現的な銅鋺のあり方と共通する。武寧王の棺外に副葬された単龍環頭大刀は，百済が521年梁（武帝）に封冊されたさいの下賜品とされたのをはじめ，陶磁器を含む大半が南朝から将来されたとされ，北九州の古墳から出土した台杯の類品（図2-2・3）も南朝の製品とみられてきた。しかし桃崎祐輔のご教示で，これら型式の銅鋺は近年の研究成果によれば，北朝（東半の北魏末，東魏・北斉代）の文物で，6世紀の東アジアの銅器研究も北朝系文物との関わりの視点から再検討が必要とされる[(4)]。武寧王陵の食器組成は，高句麗の舞踊塚（5世紀中葉）など古墳の壁画と共通するようにみえる（図1・下）が，5世紀後半～6世紀前半ころの加耶・新羅の国王・群臣級の古墳の大半は，一部高句麗スタイルの有蓋銅盒を副葬しており［金2010，5-4など］，前記諫早が注視した，高足有蓋鋺（5-10），無台鋺は少数である。なお，諫早が倭国の無台鋺のモデルとした初現的な器種は，毛利光の「盂」（鉄鉢型）（5-15・37）も対象となり，諫早は銅鋺と同一視しているが，武寧王陵の出土状態（1-左上）からも鋺と盂は区別すべきで，水容器の盂がなぜ模倣対象とされたかも検討課題である。

つぎに，古代の土器の金属器志向と関わる銅鋺模倣土器の性格も，金属食器の階層性や地域的偏在を測るテーマとなる。桜岡正信・神谷佳明は，北関東の模倣須恵器に早く注目し［1998］，その後全国の模倣土器を博捜した桃崎は，TK43期に金属器模倣須恵器が出現し，畿内と北九州で脚付杯にガラス－舶載鉛釉陶－銅鋺－須恵器－土師器の階層性が成立したとする。ただ，模倣須恵器の型式分類と編年，地域性の検証などの作業は未了である。拙論は後述するが，銅鋺の出現が宮都の供膳土器にとどまらず，陶邑窯のスタイルを規範とした各地の須恵器に強いインパクトを与えたことは注目されよう。桃崎はまた，西国に銅鋺を副葬する古墳が少ないのは，銅鋺類が寺院に伝世する「儀礼的・公的な器物」になっていたためとする［霞ヶ浦町教委2000・134頁］。なお，銅鋺と直接関わらないが，内山敏行が金属器示向の供膳食器が定着する過程で，手持ち食器（奈文研分類杯H）から置食器（杯G），手食から箸へ食事作法の変革を説いた［1997］のは，供膳食器研究で重要である。

以上，銅鋺の型式分類と編年の研究史から，食器制に関わる今日的な論点を要説した。拙文起稿の意図は銅鋺の政治史だが，軸となる型式分類に関する論考を播くと，編年の大綱はほぼ確定しているが，なお銅鋺の器種組成の理解や初現年代と系譜など，基本的な課題について検討を要する部分があることに気付いた。そこでまず，毛利光による東アジアを包括する雄大なデータ集成を受けて，2022年時点での列島の悉皆的なデータの再集成を行うとともに，不十分ながら課題の探求に努めた。したがって，銅鋺の歴史性－王権の政策と在地での受容の実態については，予定している

続稿で，論点の整理と政治史的考察を行う。

❷……型式分類と編年

銅鋺の型式分類と編年は，毛利光俊彦が東アジア列国の資料を整理，集大成するとともに器種別に編年観と合わせ詳説した［2004・05］。それを継承した桃崎祐輔は，7 世紀前半代を中心に編年の細分案を提示し［2000］大綱が確立している。ただ，桃崎の論述は型式分類にあまり固執せず，銅鋺の社会史に重点がおかれるため，各型式は「鋺」として包括されている。筆者も各器種を「銅鋺」と総称するが，倭国の古墳出土銅鋺の基本器種は，毛利光が身の口径 10 cm 以下と以上で弁別した「杯」と「鋺」［2005・77 頁］である。毛利光の型式分類は細密だがやや一貫性に欠ける部分があるので，平易で簡便な改訂案を提示する。

銅鋺は，さきの百済・武寧王陵の食器組成が示す，酒杯（飲器）＋飯鋺（飯器）を基本に案出された威信財で，配布対象の拡大と格付けによって，後半期にはほぼ素文の小鋺のみになると考えている（後述）。こうした視点から，杯・鋺の身の口径値を細分する。杯と鋺の区別に多少便宜的な区分が生ずるケースがあるが，1・杯＝口径 10 cm 以下，2・小鋺＝ 10～12 cm 台，3・中鋺＝ 13～15 cm 台，4・大鋺＝ 16～18 cm 台，5・特大鋺（盤）＝ 20 cm 以上。なお，銅鋺を法量によって分類することに，諫早直人は不要とし否定的だが［2021］，7 世紀代の古墳出土の銅鋺は基本的に威信財と考えられるので，器種・法量による可視的な価値感の存在も予想され，後述するように加飾と法量は編年にも絡む重要なモメントと考えている。

つぎに，銅鋺の政治史を標傍する拙稿の問題意識からすると，古墳時代後期後半にあたる推古朝前後の政権と律令国家の成立期となる乙巳の変（645 年）後の政権の型式的判別が問題となる。銅鋺は，政治史の大画期に即した変化がそれなりにたどれるものの，飾大刀や馬具のように製作技法，デザインによる緻密な編年は望めず，伴出遺物，とくに土器の年代観に依拠せざるをえないが，地域性まで読みこんで暦年代を知るのが至難なうえに，後期古墳に通有の追葬を考慮する必要がある。ここでは，西弘海以来の飛鳥編年を軸に，各地の編年を最新データにもとづいて 7 世紀の土器を再検討した 2019 年シンポジウム［奈文研・歴史土器研共催 2019］の成果に学び，暦年代を求めるよう努めた。

それによると，飛鳥編年では土師器杯 C，須恵器杯 H をメルクマールとして 8 世紀初（飛鳥Ⅰ～Ⅴ期）まで 9 様相の土器グループを設定した尾野善裕の編年案が提示されている。これに，陶邑編年［田辺 1981，中村 1981，佐藤 2003］を併用し検討を進めるが，当該期の暦年代の軸は白石太一郎編年［1985 ほか］による。7 世紀の暦年代定点資料として衆目が集まる，乙未の変関連とされる飛鳥・甘樫丘東麓遺跡焼土層 SX037 の性格・年代が確定しないなど残された課題も多い。なお，陶邑・TK217 窯式については，悉皆調査をふまえた佐藤隆の見解［2003］に従い，引用文を除き拙文では 7 世紀前半の型式名としては用いない。

A　類　A Ⅰ類　高脚有蓋杯（図 2-7～21（15 除），4-20），A Ⅱ類　台脚有蓋杯（2-25・26），特殊な A Ⅲ類（2-15）と有蓋杯の別型式の蓋（2-22～24，4-22）を便宜的に当類に含め一括して

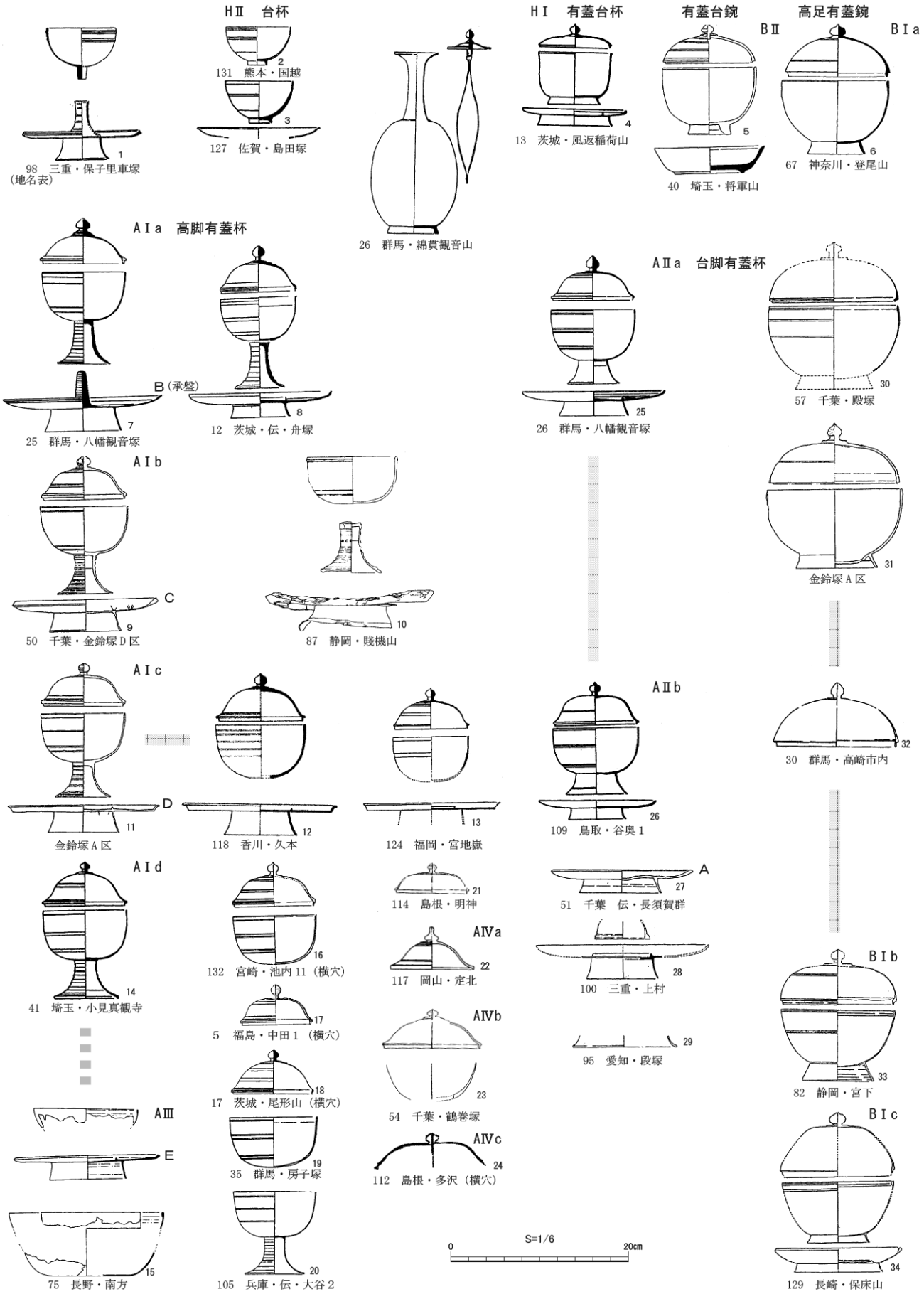


図２　胴鋺の型式分類と編年(1)

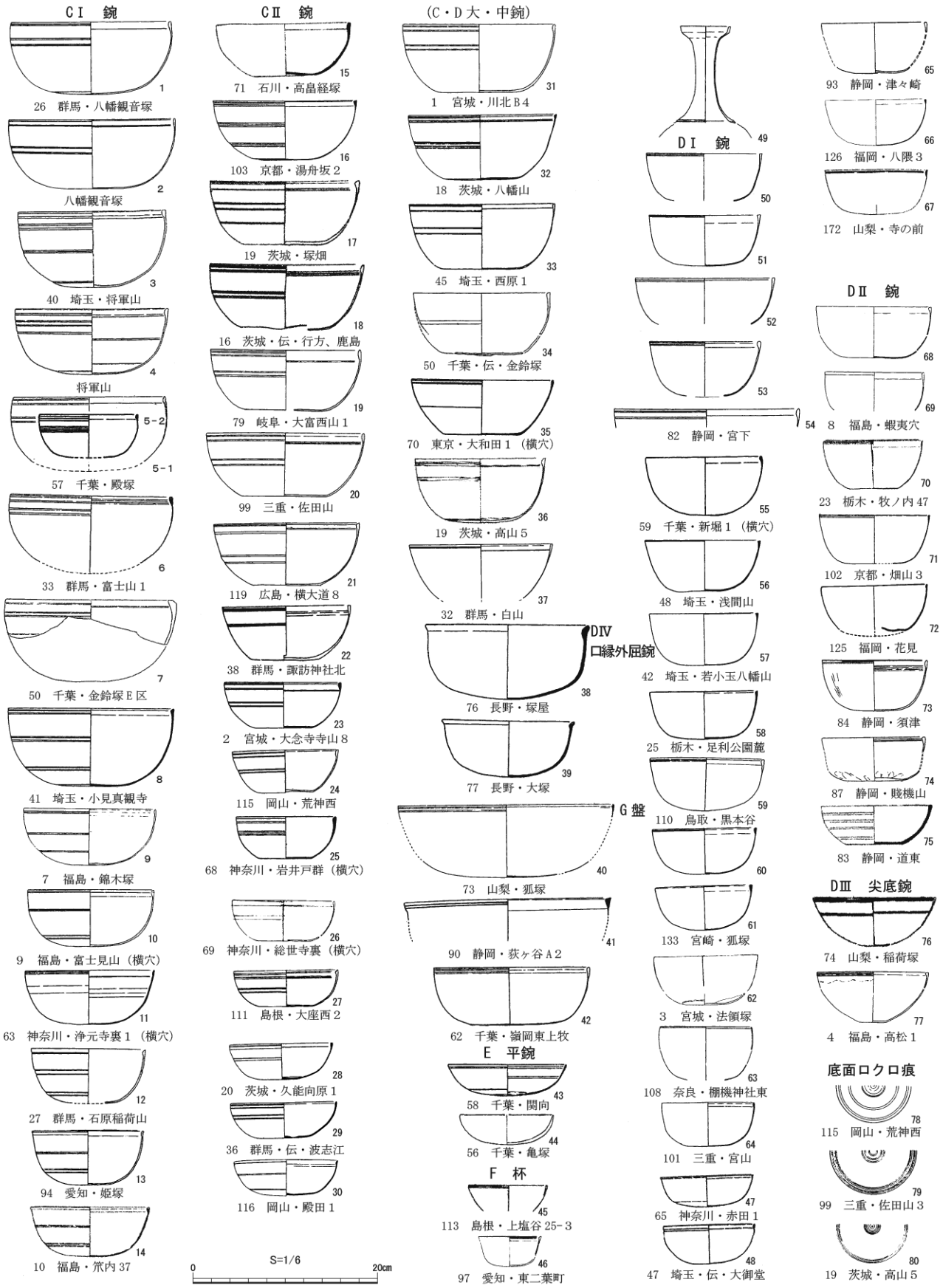


図３　胴鋺の型式分類と編年(2)

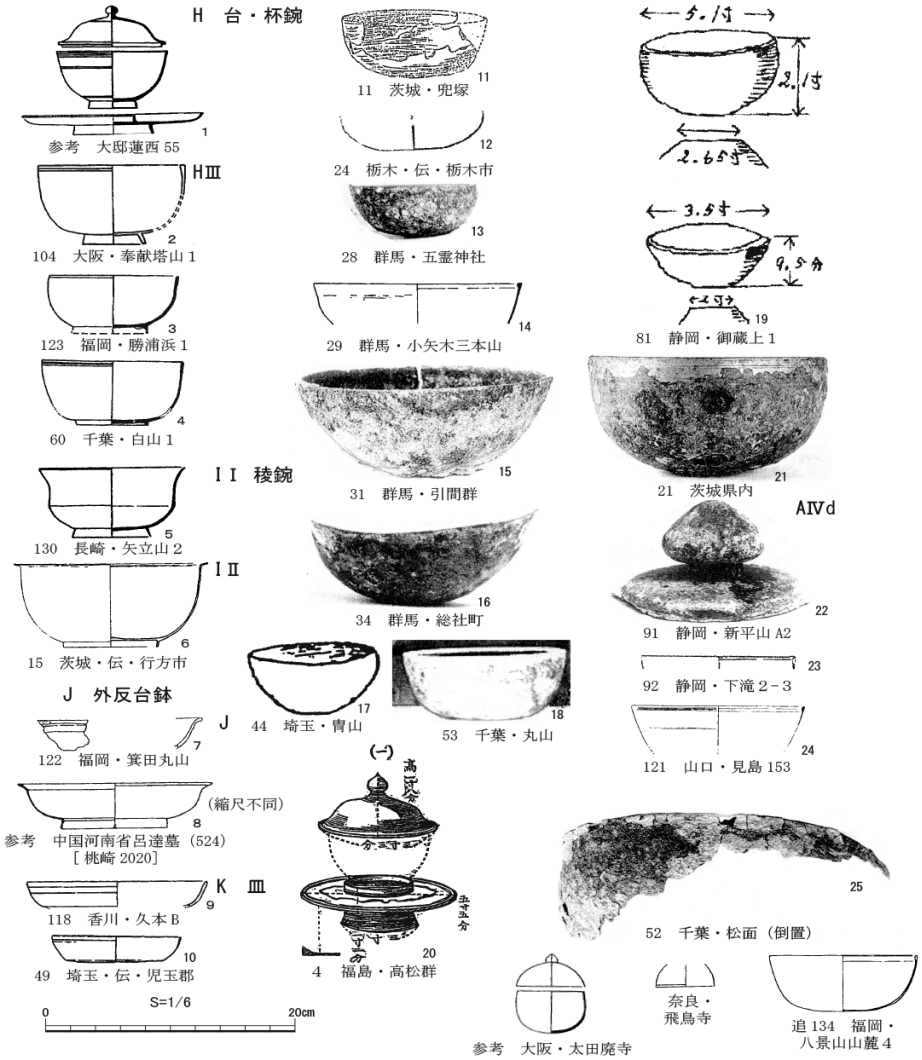


図４　左・胴鋺の型式分類と編年(3)**，右・その他の胴鋺**（写真は縮尺不動）

ＡⅣ類とし解説する。ＡⅠ・Ⅱ類は毛利光・桃崎とも「鋺」とするが，上記私見で「杯」とする。①杯身の口径が8.4～9.9 cm，②高径指数（器高÷口径×100）がほぼ57～62におさまり規格性がある。蓋は山笠型（7）が普通だが，天井部が平坦な平笠型（11・21・26）もみられる。ＡⅠ・Ⅱ類は原則承盤を伴うが，揃いの一式はＡⅠ類9例，ＨⅠ類（2-4）1例，ＡⅡ類は略図（4-20）を含め3例にとどまる。これに高脚部の省略型［小田1979］とみられるもの3例（2-12・13・16），承盤を欠くもの2例（14・20），蓋・身のみ4例（17～19・21），承盤のみの3例（27～29）を加えると25例になる。

つぎに編年については，桃崎の細分案［2020］でＡⅠ類を，①ⅠＡ･Ｂ期（TK43～TK209古期），②Ⅱ・ⅢＡ期（TK209新～TK217期），③ⅢＢ期（TK217期）にまとめると，①銅杯を承盤のソケット状突起に嵌入する舶載品で，高脚が長く裾の開きが狭いタイプ（ＡⅠａ類，7・8）から，②高脚が低減して裾が広がり（ＡⅠｂ類→ｃ類，9→10･11），③高脚の裾端部が屈折するタイプ（ＡⅠｄ類，14）の国産品へ推移するとする。なお，③の特徴に早く着目した毛利光は，その後唐様式案を撤回し7世紀前・中葉としたのは，共伴遺物から正解である。この間の変移は，承盤の口端の作工の変化にも認められ，Ａ（27）が古く，Ｂ（7）→Ｃ（9）→Ｄ（11）がＡⅠａ～ｃ類に大体

対応する。

ＡⅡ類の２例は，杯身の高径指数58（20）と78（25）で，口径が広い鋺形になるようで，指数53～57前後の安定したＡⅠ類と対照的である。大ぶりな脚台に小形の承盤が伴う後出の26も，伴出遺物から７世紀前半におさまる。21は口径7.7 cm，低平な平笠蓋の小形有蓋杯。ＡⅢ類　長野・南方古墳［松本市教委1990］の小鋺＋大鋺＋承盤のセット（15）は７世紀後半代唯一で，銅鋺の格付けが終末期まで意識されていたことがうかがえる。当墳の築造は，圭頭大刀・金銅装馬具（TK209期）から７世紀初に遡るが，銅鋺は多数の平城Ⅰ期の須恵器群を用いる古墳祭祀が執行されたさいに供用されたとみられる。

ＡⅣ類　ＡⅠ・Ⅱ類と別型式の蓋が４点（2-22～24，4-22）ある。一応有蓋杯とするが，脚台の有無，形態は未詳。

ａ類（22）：特徴的な宝瓶形鈕を付けた裾広がりの蓋で，７世紀中葉以降の年代観に異論はない。諫早は新羅産の舶載品と推定する［2021］。

ｂ類（23）：ＡⅠ・Ⅱ類に通じる山笠形蓋だが，やや低平な大形品（口径10.7 cm），図化されていないが複線文で飾られる。共伴遺物から６世紀末～７世紀前半とされる［千葉県2002］が，帰属未詳として留保。

ｃ類（24）：天井が平らで口辺が反りぎみの器形は，宝瓶鈕の法隆寺伝来品［毛利光2005・付図7，Hg2］に近似し，法量（口径12.5 cm ～）も同大で７世紀末～８世紀初とされるが，宝珠鈕なのでやや先行しよう。

ｄ類（4-22）：頂部が丸い最大径２cm強の大きい宝珠鈕をもち，現高2.2 cmの平らな天井の途中で段がつき，なだらかに口辺へ延び直に屈折するとみられる蓋片［磐田市教委提供写真］。無台鋺の身がセットになろう。法隆寺献納宝物の有蓋鋺（5-30）をモデルに猿投窯で製作された「有段蓋」埦［城ヶ谷1999］の祖型となるか，７世紀後半の特殊な器種と思われる。

Ｂ　類　高足有蓋台鋺（2-5・6・30～34）：薄い足高状高台が付く半球形の身に，口端を印籠作りとした丸笠形の蓋が被る。ＢⅠ類６点のほか，厚い三角高台が付く深身のＢⅡ類（5）が１点ある。小ぶりなＢⅠ類（6，身口径11.6 cm）とＢⅡ類（5，身口径10.5 cm）は舶載品と判定されている。34のみ小承盤を伴う。

ＢⅠ類の編年は，６世紀末～７世紀前半代のBa類（30～32）から後半代のｂ類（33）・ｃ類（34）へ推移する。それは，舶載品６は別にして，①身の口径14～15 cmから13 cmほどに小形化，②球状に膨らみがある身から，尻すぼみを呈し体部が直線化，③ｃ類34は独持の平笠形の蓋を被るという変移である。ｃ類タイプの蓋は，新羅・天馬塚古墳（６世紀後半）などに祖型がみられる［毛利光2005・付図3Ga7］が，日本での採用は伴出の須恵器から７世紀末とみられる。ＢⅡ類を特徴づける三角高台は，百済・武寧王陵で台鋺・杯（図１）（６世紀前半）などで認められる。

Ｃ・Ｄ類（図３・４）：銅鋺の約86％を占める無蓋無台鋺の型式分類は，毛利光が丸底と平底に大別し，①２～３条の複線文で加飾したAa類→②複線文が口縁部に収束されたAb類→③素文化するAc類に変移するとし［毛利光1978］，後に個別には②で①の時期まで遡る個体があるとした。諫早は毛利光の丸底と平底の区別が曖昧で，①と②・③の加飾法も，７世紀中葉の新羅・皇龍寺例などをあげ併存する事例があるとして［2021］，毛利光の見解を批判した[5]。丸底と平底は厳密な指数

化による区別は難しいが，後述するように年代判定に関係するので，底部の接地面が口径の3分の1超を目安に平底とする。また，大化前後の型式変化を重視する立場からすると，基本的に上記①から②・③への変移は確実で，複線文の加飾の有無だけでなく，器形・法量を基本とする前提で，以下複線文の加飾を原則とする①をC類，素文化した②・③をD類に大別し，「鋺C」，「鋺D」とする。C・D類はともに丸底＝Ⅰ類，平底＝Ⅱ類，鋺Dの器形は厳密な区分ではないが，半球形のDⅠa類（3-55ほか），体部が直立し箱形に近いb類（51ほか）があり，器体が尻すぼみのタイプはDⅢ類，口端が外屈する特殊な鋺はDⅣ類とした。

C　類　鋺C（3-1～30）：Ⅰ類 丸底鋺（3-1～14）。八幡観音塚古墳のAⅠ類杯（2-7），AⅡ類杯（2-25）と2点の鋺C（3-1・2）は，2世代にわたる2組の杯（酒器）＋鋺（飯器）のセットとみてよい。とり合わせ器種は異なるが，埼玉・小見真観寺古墳（2-14，3-8），埼玉・将軍山古墳（2-5，3-3・4），千葉・金鈴塚古墳（2-9・11・31，3-7），同・殿塚古墳（2-30，3-5-1・2）など国造級首長墳で1～2組のセットがみられ，とくに金鈴塚古墳A区箱形石棺内のAⅠ類杯+BⅠ類鋺，殿塚古墳で杯＋鋺の意識が明瞭である。以外の単独で出土した3-6を含めた大鋺は，高径指数45～50ほどの深身で体部が大きく膨らみ，2～3条の複線文で飾る。

これら初現的グループを代表する将軍山古墳，八幡観音塚古墳の年代をそれぞれTK10新～TK43期［埼玉県教委2018］，TK209期［大谷1991］とすることで異論はない。複数の大鋺を出土した古墳における出土状態から大鋺の先後関係を知ることはできないが，将軍山古墳と八幡観音塚古墳の3・1が深身で，口縁が内屈ぎみに作られているのは，後述する「盂」（水溶器）の器形がモデルの可能性があり，先行タイプとできるかもしれない。グループで後出的な8は小さな上げ底とし，体部上半が直に立つ。横穴式石室の第2主体（後円部北側，箱形石棺）で共伴した飾大刀，衝角付冑および前記承盤を欠くAⅠ類杯［塩野2004］などから7世紀第Ⅱ四半期を下らない。

中鋺（9～11）・小鋺（12～14）は少数だが，器形は大鋺に準じ，体部に2条の複線文が規則的に巡る。ともに略同形同大のグループをなす。中鋺9［桑折町1994］は，福島盆地の首長墳（後円・約42m）で，伴出した長頸瓶から7世紀初と判定されている。また12・13［岩原2003］もTK209期の須恵器を伴う。

Ⅱ類　平底鋺（15～30）：底径指数（底径÷口径×100）は30前後（15・16），40超（24・25）は少数で，多くは50以上で占める。毛利光は，平底鋺は新しくなるにつれて底径が大きくなるとした［毛利光2005・82頁］。機械的に年代判定の指標とできないことはいうまでもないが，傾向性は確かに認められる。16［久美浜町教委1983］は，埋葬5回（耳環9点）だが，玄室奥壁に早期の追葬のさい集積された飾大刀・馬具と多数のTK43期の須恵器群があり，上部から銅鋺が出土しているので，該期に伴うかとされる［森島2022］。底径指数が30以下の中鋺はもう1点あり，有文か再見を要する15［鹿島町1982］は上げ底に作り，圭頭大刀と7世紀第Ⅰ四半期の須恵器が共伴する。16を報告書は丸底とすることを考慮すると，平底鋺の出現は7世紀第Ⅰ四半期に遡るが，指数50以上の明確な平底鋺は，第Ⅱ四半期を中心に丸底鋺と併存して盛用されたと考えられる。28・30は発掘資料で，28［古河市教委ほか2020］は7世紀中葉の追葬に伴うとされる。30［澤田・持田・白石2009］は，陶棺に2体（同時か直後）を埋葬後追葬は認められず，伴出須恵器をTK43期とするが，飛鳥Ⅰ新期（620～30年代）に下るとみられる。

法量別にみると，大鋺 16～20（口径約 15.5～16.5 cm）はややばらつくが，中鋺 15・22（約 14 cm），小鋺 23～30（約 12 cm）はまとまる。高径指数は，大・中・小鋺とも 40 ていどで統一され，小鋺には 35 ほどの浅身の鋺（27～30）があり，生産の場での法量・形態の管理がうかがえる。

D 類　鋺 D（3-31～39，50～77，54 除）：Ⅰ類 丸底鋺（36・50～67，54 除），Ⅱ類 平底鋺（68～75），丸・平底鋺（4-11～19）。碗 C との違いは，①複線文の加飾が口縁部に収束ないし無文，②大・中鋺は少数，大半が口径 10～11 cm 台の小鋺，③丸底と平底の比は約 2：1，と要約できる。ほかに若干の尻すぼみ形を D Ⅲ類 尖底鋺，口縁外屈形を D Ⅳ類 口縁外屈鋺とする。

D Ⅰ・Ⅱ類の大・中鋺は，小鋺の器形・法量がまとまりがよいのに対し，31～33 以外は器形がばらつき，論者の年代観も不統一である。31・33 は高径指数 45 と 50 で，最古グループとした鋺 C の大鋺と同じ深身だが，口径がひとまわり小さく，底径指数 50 以上の広底から立ち上がる体部は，膨らみを減じている。体部の直線化傾向は，35・37 ではいっそう明瞭で，36 のように平底風の丸底で，器体上半が直に立つ器形は鋺 D の典型である。31～33 は一見同一型式だが，31 は共伴土器から 7 世紀末～8 世紀初と判定でき［大崎市 2009］，33［塩野 2004］も 7 世紀末の方頭大刀［豊島 2014，B Ⅱ類］と飛燕形鉄鏃が伴出。また，器形が異なるが，蕨手刀，和同開珎と 7 世紀末の方頭大刀が伴出する 37［諫早・吉澤ほか 2012・14］は，7 世紀末～8 世紀初の銅鋺として周知されている。ところが 32 は，無畝目の頭椎大刀を傍証に TK209 期とされ［大谷 1996］，年代観に齟齬を生じている。36 は埋葬主体の箱形石棺を移築した最初の追葬に伴うとされ，7 世紀前・中葉の年代が与えられている［茨城県ほか 2020］が，型式的には 7 世紀中葉が妥当であろう。

問題の 1 点は，7 世紀末ころの 31・33 が，7 世紀前半代に一般的な 2 条の複線文で飾られていることである。もっとも，32 の複線文は 2 本 1 対で 2 条巡り，口縁直下では凸線を意識しているとされる［大谷 1996・706 頁］ので，底径指数 50 超の 31・33 より底部が小さく器体が開くことと合わせ，7 世紀前半代で大過ない。それにしても，鋺 D 類が全体に小形・素文化するなかで末期の銅鋺が飾られたのは，大鋺・中鋺という法量差による格付け意識と関係するのではなかろうか。問題の 2 点目は，7 世紀第Ⅲ四半期の基準となる銅鋺の型式が不確定ななかで，37 は新羅・皇龍寺九重木塔（643～646 年落成）心礎下出土銅鋺（5-28）との類似が指摘されてきた。したがって，鋺 D の存続年代が 7 世紀中葉を上限とし，末葉までの幅をもつことをとりあえず確認しておきたい。

上記によって，鋺 D にも鋺 C に準ずる有文の大・中鋺が少数存在することが判明したが，鋺 D の約 85 %は素文（口縁帯を複線文 1 条で加飾を含む）の小鋺である。当グループで暦年代の基準となる古墳として，57・59・60・64 があげられる。鋺 C 小鋺に近似し半球形丸底の 59～61 は，埦 D では古相を呈し，60・61 の伴出須恵器は 7 世紀第Ⅱ四半期～中葉である［東・岡本・柄本 2006］。64 は，1～3 次の埋葬に伴う遺物が整理され，銅鋺は 3 次埋葬（TK217 期）で双龍環頭大刀とともに追葬されたとされる［藤田 1992，小栗 2003］が，ティピカルな鋺 D で年代が齟齬する。59 は，さきの新羅・皇龍寺木塔心礎下銅鋺との型式的対比で示された D 類小鋺の上限年代と大体整合するが，圭頭大刀との共伴関係に問題を残す。57 は，鋺 D に多い口辺直立，平底風丸底を呈する。夾紵棺を内蔵し，共伴する方頭大刀 B Ⅱ類，フラスコ形瓶ともに 7 世紀第Ⅳ四半期で［塩野 2004］，D Ⅰ b 類の暦年代の定点を知ることができる。

このほか D 類中・小鋺 4 点，盤（特大鋺）1 点と水瓶・鏡（49～54）を出土した静岡・宮下古

墳［静岡県1992，岩原2003］がある。1914年，地元民の私掘で横穴式石室から箱形石棺・刳抜き家形石棺が発見されたが，遺物の出土状況は未詳。鋺Dは口縁・体部形態から50・51（DⅠb類）と52・53（DⅠa類）に分かれ，重鋺の可能性もある。水瓶は，法隆寺献納宝物の仙盞形浄瓶（5-39），ないし一連の王子形水瓶［中野1959］が周知だが，有段口縁（盤口瓶）は例がない。伴出した障泥吊金具は7世紀前半・中葉とされ［片山2018］，追葬の銅鋺は2回（2世代？）に分けて副葬された可能性もあろう。宮下古墳が所在する駿河・狩野川流域には，100基クラスの土狩五百塚古墳群と白鳳寺院日吉廃寺があって，在地首長と有力寺院が一体化して銅鋺を共有する状況を示す。

このように，小鋺Dを型式的に検討してみると，半球形の丸底鋺（55・59～61）が古相を示すのは確かと私考するが，課題とした7世紀第Ⅲ四半期と第Ⅳ四半期の型式差として普遍化するには，なお検討を要する。つぎに，鋺Dの器形・法量をグルーピングすると，DⅠ類小鋺は丸底・平底とも口径10cm前後も若干あるが11cm台に集中し，高径指数48～50ほどで器高も5～5.5cmに均一化されている。指数45以下の浅身（60・67），55以上の深身（63）は若干である。全体にきわめて規格性が高い。なお，体面を複線文で埋めた75は，法隆寺献納宝物のAⅠ類杯（5-29）の用例から，7世紀末以降の製品であろう。

ところで毛利光は，初稿［1978］後に調査され7世紀前半と判定された黒本谷古墳（59），畑山3号墳（71）で素文小鋺が出土したことを受け，従来唯一の6世紀後半～末の事例とされた花見古墳［72，鏡山1959，金銅装刀子・馬具・須恵器出土］は保留としながら，素文小鋺の一部が7世紀前半に遡ることを認めた［1991・193頁］。近年，畑山古墳群（4基）と周辺の古墳を調査した諫早直人は，既往の調査成果も援用し，畑山3号墳の年代観を追認するとともに，銅鋺の蛍光X線分析の結果，銅に定量の錫・鉛を合わせた三元系青銅器とした。そして金属成分で砒素の含有率が低く，鉛同位体分析でも半島産に比定される銅鋺が少なくないという文献［澤田2018］を引いて，畑山3号墳出土の銅鋺は，正倉院宝物に連続する新羅産の可能性が高いとした［諫早・岡田・山口2022・193頁］。

型式的に古相な黒本谷古墳の銅鋺は，7世紀第Ⅱ四半期に入るかもしれないが，畑山3号墳の横穴式石室は破壊され奥壁と西壁の一部が遺存するだけで，出土した須恵器（5点）に伴う確証はなく，銅鋺は7世紀後半代の典型的なタイプである。そのことは，畑山1・2号墳の須恵器に7世紀第Ⅱ四半期以降の坏Hが見出せる［吉村1985］ことで予想され，追葬に伴う可能性を考えるべきであろう。花見古墳については，銅鋺は半球形の古式タイプのようだが底部が破損し，遺物は横穴式石室の玄門寄りにまとまるが，剣菱形杏葉を含むので6世紀前半に遡り，遺物全体の検討が必要だが，7世紀中葉以降の追葬と考える。なお，畑山3号墳出土銅鋺の理化学分析の評価に論評する能力はないが，AⅠ類杯が倭国独自のスタイルであることはつとに指摘されており［小田1975］，同じ7世紀前半の横大道（よこおおどう）8号墳（21），荒神西古墳（24）など一連の鋺Cの一群が国産品と認定されている（後述）。それに加えて，検討してきた7世紀代の銅鋺の器形・法量にみる規格性の高さから，諫早説ににわかに賛同できない。

DⅢ類　尖底鋺（76・77）：口径12～13cm，底径2cmほどの円錐形を呈する小鋺が2例知られる。76は，甲府盆地南東縁の台地に築造された有力墳［山梨県1998］で，銀象嵌装円頭大刀・甲冑・馬具などが出土した。銅鋺は7世紀前半の追葬品とされるが，副葬された須恵器は年代に幅があり，長頸の平瓶などが伴出したのであれば7世紀第Ⅲ四半期ころとなり，検討を要しよう。77

は磐城北辺の海通りに所在する首長墳（後円，21.5 m）［相馬市 2015］で，奈良・藤ノ木古墳と同巧の希少な金銅製花弁形歩揺付辻金具をはじめ，馬鈴・挂甲などが副葬されていた。大野延太郎の巡見記録［1931］に紹介されているＡⅡ？類高足有蓋杯（4-20）は，尖底鋺に先行して初葬に伴った可能性が高い。同一古墳に離れた世代を跨いで 2 点の銅鋺が配布された例は，静岡・賤機山古墳（2-10，3-74）など 6 例ある。

ＤⅣ類　口縁外屈鋺（38・39）：口端が外屈し，体部が直立ないしやや開く大鋺と中鋺が各 1 点ある。口縁の作工は，統一新羅の王宮関係とされる皇南洞 376 遺跡出土の口縁が外屈する陶質土器坏・埦・小盤など 7 世紀後半の土器［重見 2012・11-4851］との関係を考慮すべきかもしれない。塚屋，大塚両古墳［原 1995］は北信諏訪地域の近隣に所在した有力墳で，もといずれかの古墳に大・中鋺のセットで配布された銅鋺が，分与・副葬された可能性がある。

Ｅ　類　平鋺（43・44）：高径指数 30 強ないし以下の低平な丸底鋺。口径 12.6 cm と 10.2 cm の小皿形がある。43［千葉県 1974］・44［富津市教委 2013］は，房総半島の南東と南西（祇園・長須賀古墳群）の首長墳で，前墳は複数の飾大刀をもつ。それぞれ，7 世紀前半，7 世紀中葉とされる。

Ｆ　類　杯（3-45～48）：口径 10 cm 以下の杯形の器種で，数は少ない。47 は，鋺Ｃ丸底小鋺の縮少タイプで，小鋺としてもよい。48 は殿塚古墳（3-5-2）に類するが，素文で 7 世紀後半に下ろう。47 は南武蔵の有力墳の羨道から，7 世紀初の長頸提瓶の蓋の状態で出土したという［小宮 1994］。愛知・二葉町遺跡［名古屋市教委 2005］出土の 46 は，3.2 × 6.8 cm の最小品で，付近の古墳群から流出したと推定される。

Ｇ　類　盤（特大鋺）（40～42・4-25）：口径 10 数 cm ないし 20 cm 以上の洗面器形の大形容器。当器種を毛利光は丸・平底鋺あるいは鉢と適宜呼び分け，奈文研分類では「盤Ａ」とする。ここでは「盤」とするが，小形の 42（口径 16.7 cm）は特大鋺の法量で器形も同じい。40 の器形は鋺 Da 類，41・42 は Db 類のタイプだが，8 世紀代の浅身で器体が開く型式の前身となる。中国では，江蘇省大橋果園場窖蔵（550～579 年）［夏 2010，岡村 2015］に代表される倭国の祖型とみてよい事例が見出せる。半島では，7 世紀後半の新羅・雁鴨池遺跡［韓国文化財管理局 1993］などで玉縁の平底盤が出土しているが，倭国の型式は管見にない。資料が乏しく確定できないが，倭国の盤の系譜は，東アジアの外交儀礼（賓札）導入の一環として，中国製品モデルと倭国の鋺形器形を融合した宴器として案出された可能性があろう。

千葉・松面（まつめん）古墳（方・44 m）［木更津市教委 2016］出土の 4-25（國学院大学考古資料館提供写真）は，祇園・長須賀古墳群で金鈴塚古墳の次世代（7 世紀前半）の首長墳とされ，銀装捩環頭大刀・金銅製双魚佩など優秀な副葬品がある。40［春日居町 1988］は，甲府盆地の中央丘陵に占地する有力墳で甲冑・馬具をもつが，7 世紀代を通して存続するので盤の年代未詳だが，上記大橋窖蔵例に酷似する。これに対し 41［藤枝市埋文 1980］は，駿河湾南西岸に流入する瀬戸川流域に展開する群集墳の一墳で，目立った遺物はない。40 を標本にすると，藤原宮跡（7 世紀末）出土の有文盤［諫早・降幡 2015・図 140-3］の浅身，平底から平城宮跡（8 世紀）の丸底化し器体の開く型式に定型化され，大宰府政庁前面地区（5-34，9 世紀）［横田 1989］，栃木・日光男体山遺跡（9～10 世紀）［日光二荒山神社編 1963］への変遷をたどることができる。

Ｈ　類　台杯・鋺（2-2～4，4-2～4）：Ⅰ類 承盤付有蓋台杯 1 組，Ⅱ類 台杯 2 点，Ⅲ類 中・小

鋺が3点ある。2-4［霞ヶ浦町教委2000］は，霞ヶ浦内海の一角に占地する首長墳（後円・78m）で，多くの飾大刀，馬具などが出土。有蓋台杯は偏平な蓋を被せた低い高台の器体が直立する独持のタイプで，石室前室の須恵器はTK217期だが，出土状態から初葬のTK209新期の埋納とみる見解［桃崎2017・131頁］に従う。Ⅱ類2・3は北九州の6世紀前半・中葉の首長墳出土，北朝東魏（534～550）製の台杯［矢部1985］。4-2［羽曳野市1994］は，大阪湾から大和川沿いの竜田道が奈良盆地に入る入口に占地し，飾大刀・馬具などにミニ甑が伴う渡来人墓とされ，台鋺は口径12cm，器体がゆるく開いて立ち上る。伴出須恵器にTK43期が目立つので最古式としてよい。北九州宗像地域臨海地の小規模な古墳群出土の3［横田1989］は，口径10.7cmで2と同類。4は，房総の手賀沼北岸丘陵の有力墳で口径11.3cm，器体が立ち高台は低い。毛利光は3を7世紀初，4を7世紀前半・中葉とする。H類は法隆寺・正倉院宝物にはほとんど見当たらないが，平安後期～中世に類似の承盤付有蓋台杯が灑水器・塗香器として流布している［毛利光2005・付図8］。

Ⅰ　類　稜鋺（5・6）：典型的な稜鋺Ⅰ類（5）と，体部中位の沈線・凸線のないⅡ類（6）が各1点ある。対馬のT字形石室出土の5［小田1979］は圏足で，共伴の長頸瓶から7世紀末とみられる（毛利光は8世紀前半）。統一新羅で7世紀後半以降，稜線を強調しない印文有蓋台鋺の一類が盛行し［重見2012・図381ほか］，慶州・雁鴨池遺跡で5と同巧の小稜鋺が出土しており，舶載品の可能性があろう。正倉院宝物（8世紀中葉）には，口辺がゆるく外反，器体が直立するⅠ類の後身（5-33）などのほか，新羅製品とされる重鋺と皿・匙約1,480点［正倉院事務所1976］が納められている。

J　類　外反台鉢（7）：口径10数cmで大きな台脚が付き，器体上部が強く反転する鉢。河南省呂達墓をはじめ，中国南北朝時代の明器にみられる。当器種に着目した桃崎は，北朝系の器種とする［2020，140・141頁］。福岡・箕田丸山古墳［小田ほか2004］出土の破片があるのみだが，6世紀末以降銅鋺の忠実な模倣須恵器が大阪・陶邑窯をはじめ列島で散発的に広域で出土することが確かめられており，模倣土器の意義を知る素材となる（後述）。

K　類　皿（9・10）：低平な平底の小皿が2点ある。10（2.3 × 10.4 cm）は，古墳出土か未詳。9（2.1 × 14.6 cm）は，AⅠ類杯（2-12）に伴う承盤に用いられたと考えられる。

上記のうちH～J類は，古墳出土品では特殊な銅鋺に属し，とくに半島との交流が盛んな北九州や渡来人に関わる古墳のばあい，畿内政権からの一元的配布品と即断できない。

❸……銅鋺をめぐる問題

（1）銅鋺の初現と系譜（図5）

前節で述べたように，①AⅠ類高脚有蓋杯は，半島に直模モデルが見当らず，AⅡ類台脚有蓋杯も倭国の創作とした。②BⅠ類高足有蓋鋺は，百済の事例が乏しいものの三国時代の一般的な飯器である。ただ，5～6世紀前半代の半島の古墳出土鋺は，平高台ないし有台のやや偏平な半球形の有蓋盒（5-3・4）が多い［金2010ほか］。6世紀末葉には慶州・皇龍寺西金堂基壇（574～584年）土内出土品（5-11）［諫早2021］が知られ，倭国では6世紀末ころ同型式の登尾（とおのやま）山古墳の舶載品（2-6），同じころ殿塚古墳の国産品（推定，2-30）が現れる。③C類無台鋺は，諫早の指摘するように，

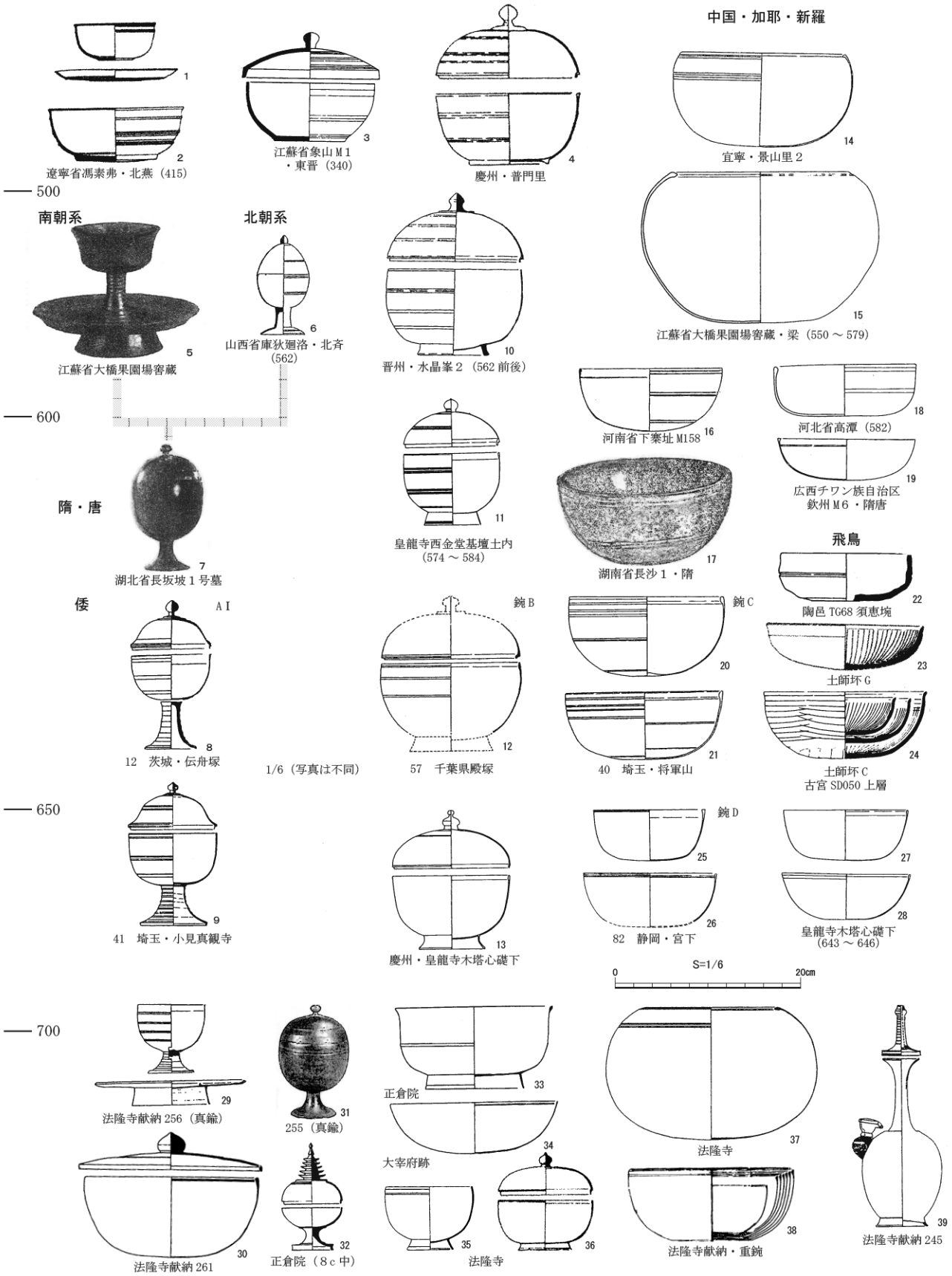


図5　胴鋺の系譜と模倣（南北朝系の隋統合案は桃崎2020）

5世紀後半～6世紀前半の加耶・新羅の出土品に器形が近似する［諫早2021］。ただ，口縁が開く通有の鋺でなく「盂」（5-14・15）の特徴である口縁が内弯する鋺（3-1・3）を最古型式かとした。ＡⅠ・Ⅱ，ＢⅠ，ＣⅠ・Ⅱ類の銅鋺を出土した古墳の築造年代は，伴出遺物の考察によってTK209期（7世紀初）とするのが一般的だが，なお検討を進めるとTK43期に遡るものも少なくない。

ところで，初現期の銅鋺のメイン器種であるＡⅠ類杯の系譜について桃崎は，中国南北朝～隋時代（5～6世紀，581～618）の関連資料を博捜し，特徴的な高脚部の祖型を湖北省長坂坡1号墓の宝子（香盒）（5-7）や梁（南朝）・大橋果園場窖蔵（550～579年）の灯盞（燭台）（5-5）などに求めた。6世紀後半の資料が不足しているが，ＢⅠ・Ｃ類鋺は新羅との対応関係が認められる。ただ，隋代の複線文で加飾した鋺Ｃ（5-17）［湖南省博1959］などは，隋が北斉（北朝）の工房を継承しているとすれば，型式的に倭国の鋺Ｃのモデルとなりうるだろう。

桃崎は，倭国の銅鋺が，隋帝国との国交に伴う「賓礼」（外交儀礼）の一環をなす饗宴儀礼の導入を契機に案出されたとする新説を示した。さらに，倭国への鋳造挽物技術の伝来と銅鋺の国産化を，文明開花を表徴する飛鳥寺（法興寺）の創建に関わり，百済の「鑪盤博士」将徳白昧淳の来日（588年）と百済工人による銅鋺製作を想定する見解［桃崎2020・150～151頁］も，初現的な銅杯・鋺を副葬する古墳の築造時代とほぼ整合するので妥当性がある。ただ，品質の優劣によって，初現的なＡⅠ類杯（TK43～TK209古期）を舶載品とし，国産化は千葉・金鈴塚古墳以後（TK209新期）とするのは，ＡⅠ・Ⅱ類を倭国独自の型式とする立場から是認できない。国産化初期の銅鋺が堅牢なのは，百済工人の作とすれば説明できるのではなかろうか。ここで，上記の疑問に関わる銅鋺の性格を考えてみよう。

倭国銅鋺の飲酒器（杯）＋飯食器（鋺）＋陶製酒瓶を基本とする器種組成は，さきの百済・武寧王陵と同じだが，倭国のセットは実用の食器や仏器でなく古墳の威信財として推古朝前後の政権から一元的に配布されたと考えている。そのことは，南・北朝の金属奢侈具（銅製明器）にヒントをえたと思われる，ＡⅠ・Ⅱ類の高貴性を演示するスタイルや，半島列国の飯器の直模であるＢ類のいずれもが，実用の食器に適しない大ぶりに作られていることからもいえよう。銅鋺の創出と金属食器の普及は別のテーマであり，同様に仏教文化の影響が顕現するのは，天武・持統朝（白鳳期）以降を考えている。銅鋺を推古朝前後の政権が新たな威信財とした現実的契機が，隋帝国の成立に伴う東アジアの外交秩序の再編にあったとすると，倭国独自の器種・組成と型式の創案は，倭国の外交理念である半島三国の上位に立つ「東夷の小帝国」［石母田1973］の象徴だったと考える。その意味で銅鋺は，当初倭政権の外交権の掌握を東国の大首長層に示威するモノ資料といえよう。ただ，桃崎は銅鋺の創作を，第1回遣隋使（推古8・600年）以来推古朝の外交案件となった，隋に東アジアの「大国」と公認される基準である礼制の受容，整備［黒田1998］と関わらせて理解しようとする。私見は，礼制の導入とは直接関係せず，6世紀中葉以降の半島経営の破綻と半島列国が隋と冊封関係を結び，東アジアの外交秩序が再編・緊迫した状勢への対策として，東国の大首長向けの新たな威信財として案出されたと考えている。隋に恭順しつつも冊封を受けず，一定の自立性と現実的な政策の施行に推古朝の画期性をみることができよう。そして，桃崎と筆者の見解の違いが，つぎに述べる銅鋺の初現年代で10数年のずれを生じることになる。

6～7世紀における倭国と中国，半島列国の外交・交流については多くの論著がある［鈴木2012ほか］が，考古学から日羅外交を軸にした考察には，江浦洋［1994ほか］，白井克也［2000ほか］，重見泰［2012］などの論考がある。重見［2012・第Ⅲ部1・Ⅲ章］は，従前の印花文陶器の編年を批判的に検討したうえで，倭国の印花文陶器の分布が，6世紀代の北九州中心から，7世紀初～前半に印花文瓶を主体（約70％）とする組成に変化するとともに，畿内とくに外交庁舎が所在する難波と小墾田宮，蘇我氏関連の邸宅･寺院を包括する飛鳥甘樫丘周辺での出土が目立つとする。ただ，外交の実権は大臣・大夫にあったとみる。文献史学でも推古朝は，隋答使・新羅使を宮室（朝廷）まで招き饗宴を含む賓札を執行するようになった画期と評価されている［田島1986・297頁以下］。饗宴で用いられた宴器は詳らかでないものの，北朝・隋系の銅鋺の3点セットが宴器のシンボルと認識されていたことは想像に難くない。なお，日羅外交でもたらされた新羅陶器のメイン器種である印花文瓶（6-47）は，運搬器とされる（前掲江浦・重見）。江浦がいう薬物・顔料・蜜汁などが考えられなくはないが，畿内を中心とする出土遺跡からみて，希少な緑釉瓶をはじめとする印花文瓶は，舶来の酒瓶として珍重されたのではなかろうか。

つぎに，倭国の東アジア外交への参入と緊密に関わる銅鋺の初現年代を検証する。桃崎も認めるように，銅鋺模倣須恵器が陶邑TK43-1号窯で焼成されている（7-2）が，TK43期を6世紀末とする通説を批判し7世紀代に下げる見解［畑中1999ほか］に賛同するため，7世紀前半代に4～5の銅鋺型式を設定するまとめになっている［2020・133頁，第1図］。これは，上記の銅鋺の国産化を7世紀初とする自説（606年ないし608年かとする［2020・151頁］）との整合化を図るためかと推測するが，その後西口壽生［1999］，佐藤隆［2003］などによるTK43期7世紀説の再検討が進み（註2参照），通説の年代観が再認されたと考えている。したがって国産の銅鋺は6世紀末に生産･配布が開始されたと訂正すべきである。

なお，模倣須恵器の検証を進めると，陶邑窯ではTK23期（5世紀末）に例外的だが長杯（ガラス？）写しとみられる台付坏（7-21）があり，MT10期（6世紀中葉）には千里窯ST40号窯［藤原1995］で台脚を欠く銅鋺模倣須恵器とみてよい事例（7-23）と坏（22）が焼成されていたことが判明した。北九州では，6世紀前半・中葉に百済・武寧王陵と同型式の台杯を副葬した首長墳が知られる（2-2・3）ので，贈物・交易レベルの高級食器の模倣があっても不思議でないが，ＡⅠ・Ⅱ杯類がモデルではないと思われる。なお今後の資料の増加をまちたい。

ともあれ，銅鋺の製作・配布の初現を6世紀末とすると，桃崎が注目した『日本書紀』に記す最初の遣隋使に先行する崇峻朝（588～592年）の「呉国」＝隋へのいわゆるプレ遣隋使説［2019］が問題になる。狩谷棭斎の考証を受けた当説に従えば，倭国の北東アジア外交への参入が遅れたとする通念と異なり，590年の高句麗＝遼東郡公，百済＝帯方郡公，594年の新羅＝楽浪郡公と同時的に参加したことになろう。

そしてさらに注視されるのは，崇峻朝の遣使が上毛野君久比だったことであり，「呉権」などの雑宝を持ち帰り天皇に献上したという（『新撰姓録』巻3）。上野が，5世紀以来関東における積石塚や牧に関わる渡来人ないし渡来系文物・遺構受容のメッカだったことはよく知られており［若狭2011ほか］，崇峻朝（TK43新期）の首長墳を代表する綿貫観音山古墳（後円・97m）の副葬品の大半は渡来系の舶載品とされている［群馬県立歴博2021ほか］。桃崎が強調する隋関連では，銅水

瓶が北斉製［矢部1985］のほか，①引手外十字文鏡板，②心葉形鏡板など浮遊環や立耳長方形の轡飾装具の一群，③花弁形歩搖飾など飾大刀・甲冑・馬具は，新羅の舶載品が主体である。内山敏行は，これらの副葬品のメイン器種は，半島三国で身分標式とされた威信財で交易品でなく，国家間の外交のほか，有力首長の往来による入手を想定する［2011・146頁］。綿貫観音山古墳の副葬品の様相は，『仁徳紀』53年条の新羅征討軍の上毛野竹葉瀬・田道［笹川2005］のごとき伝記上の人物の対新羅戦での戦利品を含むように思えてくる。

それでは，銅鋺の配布主体である倭政権の中枢で，TK43期に銅鋺を製作した史的環境は認められるのだろうか。奈良・斑鳩地域に顕在する藤ノ木古墳の副葬品［白石1995］は，綿貫観音山古墳と同じ倭系の楔形・捩環頭大刀（5振）を保持することがまず注目され，百済系の円頭大刀，装身具もみられるが，上記①②③の新羅系馬具をセットで共有し，王権と上毛野君との親密性を端的に示す。上毛野君の外征記事については，継体朝の七輿山（ななこしやま）古墳（後円・146 m）に代表される上野の首長系列が再編され［観音塚考古学資料館2022］，内山のいう「舶載品ラッシュ」［2011・144頁］が現出する崇峻・推古朝段階の史実と考えられる。もっとも新羅系馬具は，政権中枢ゾーンでは，桜井市珠城山3号墳（後円・47.5 m）など有力首長墳の出土例はあるものの，全体に副葬墳は少なく［千賀2003，古川2019］，上野でも継続せず影響力は限定的とされる。

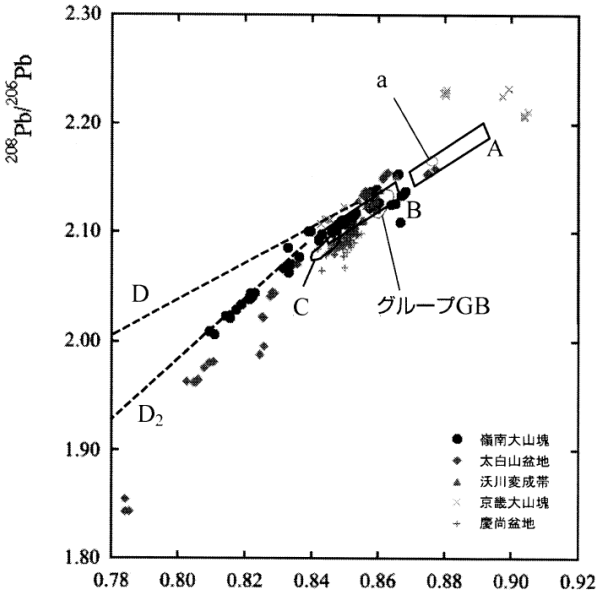
迂遠な考定をめぐらしてきたが，倭国における銅鋺の初現は，物部守屋を討伐した丁未の変（587年）直後に，蘇我馬子と豊御食炊屋姫（推古）が実権を掌握した崇峻朝，さきの鑪盤博士の来日後ほどなく銅鋺の製作が始ったことになろう。次節で要約する理化学分析の所見で示された，鋺B・C類の製作に要する二元系ないしそれに準ずる三元系高錫青銅器の生産技術を新羅はこの段階で獲得していたとされる［諫早2021・134頁以下］ので，倭国が受容する外的条件は準備されていた。しかし『日本書記』に記す6世紀の半島三国との交渉は，新羅が「調」の備進にほぼ限られるのに対し，軍事的救援の見返りに百済から医薬・暦や造寺造仏関係の技能者（博士）・僧の渡来がたびたびあり［田中2015・Ⅱほか］，598年の隋と高句麗の開戦による対新羅関係の悪化も考慮すると，当該期に新羅鋳工の飛鳥の宮都への来日は考えにくい。やはりさきの飛鳥寺の建立に伴う百済の「鑪盤師」が銅鋺の創作に関わったとする桃崎説に従いたい。

（2）理化学分析

銅鋺誕生の背景となる政治・経済・外交問題の解明と関わって，倭国の銅・錫・鉛原料の調達ないし鉱山の開発を探索する理化学分析の現状を整理する。鉱石の成分組成を測定する蛍光X線分析は，銅・錫・鉛の三元系高錫青銅器と，銅80 %，錫20 %を目安とする二元系の「佐波理」を識別し，製作技術の達成度を知るのに有効で，砒素1 %（2～4 %）以上の含有が確認されれば国産品と判定される。鉛同位体分析は，馬淵久夫・平尾良光によって設定された鉛原料の産地領域の分布から原料の産地を特定する方法［1987］で，齋藤努を中心とする日韓共同研究で成果をあげた［齋藤2019ほか］が，華中・華南領域とされてきたB領域のデータと慶尚北道・漆谷鉱山などのデータの分布が重なり（付図），原料産地の比定の再検証と半島の鉱山の時代考証が要請される。一方，慶尚北道を基盤とする加耶・新羅の勢力拡大の過程で，楽浪郡の滅亡（313年）による銅・鉛製錬工人の移動に伴う技術の導入と国産原料利用の可能性も言及されるようになった［齋藤，土生田ほ

か 2019］。

表１は，古墳出土銅鋺の分析一覧である。埼玉・群馬県のデータがかなりまとまっているものの全体を推量するには不十分で，今後の測定作業の継続が期待される。現況では，砒素の組成値から図３-24・荒神西古墳，21・横大道８号墳，55・新堀カンカンムロ横穴墳の鋺Ｃ・Ｄが国内産で鉛同位体分析のＣ領域（日本）とも一致する［澤田・齋藤・長柄・持田 2019 ほか］。これらのデータをふまえ持田大輔は，列島の銅原料と製品の生産を７世紀中葉とし，前半代に遡る可能性も



付図　韓国内鉱山の鉛鉱石の鉛同位体分析（a 式図）［齋藤 2019］

表１　古墳出土銅鋺の理化学分析

年代	№県	古墳	器種	Cu 銅	Sn 錫	Pb 鉛	As 砒素	組成	産地領域	文献
	13　茨城	風返稲荷山	台杯（蓋・身）・承盤	（110 と略同値）					Ｄの外	平尾・榎本・早川 2000
6c. 末	26　群馬	綿貫観音山	水瓶	70	19	10	0.3	三元		長柄・杉山・清水・三船 2013
7c. 初	25　群馬	八幡観音塚	高脚杯・蓋	75	20	4	0.2	三元		
			・身	74	25	0.3	0.1	二元		
			鋺（古）C	76	20	3	0.1	三元		
7c. 前	27　群馬	石原稲荷山	鋺 C	69	20	10	0.8	三元		
7c. 初	33　群馬	富士山１号	鋺 C	72	27	0.2	0.1	二元		
7c. 後	59　千葉	●新堀カンカンムロ横穴	鋺 D	20	15	58	2.6	三元		永嶋 2014
7c. 前・中	60　千葉	白山１号	台鋺	59	19	20	0.4	三元		
	61　千葉	根戸船戸６号	鋺 D?	79	20	0.3	0.3	二元		
7c. 前	15　茨城	伝・行方市（旧玉造町内）	稜鋺	58	25	15	0.4	三元		
7c. 末 8c. 初	32　群馬	白山	鋺 D	68	30	—	0.6	二元		諫早ほか 2012
7c. 前	119　広島	●横大道８号	鋺 C	77	7	9	7	三元	C	澤田・齋藤・長柄・持田 2019
7c. 前	115　岡山	●荒神西	鋺 C	71	1	22	4.5		C	
7c. 初	116　岡山	殿田１号	鋺 C	62	16	21	0.4	三元	B・D2	
7c. 中	117　岡山	定北	蓋	73	23	2	0.3	二元	D	
7c. 中	110　鳥取	黒本谷	鋺 D	63	14	22	0.2	三元	Ｄの外	
7c. 初	40　埼玉	将軍山	鋺 C（2）	（45・48 と略同値）					① D2 ② D2，B 境	齋藤・中井 2019
7c. 後	42　埼玉	若小玉八幡山	鋺 D						D，B 境	
7c. 後	45　埼玉	西原１号	鋺 C’						D，B 境	
7c. 中	47　埼玉	伝・大御堂	鋺 D						A	
7c. 後	48　埼玉	浅間山	鋺 D						D，B 境	
	49　埼玉	伝・児玉郡	皿						B	
7c. 前	36　群馬	伝・波志江	鋺 C						D・D2，B 境	
7c. 前	118　香川	久本	有蓋杯・身						D2’	
			承盤						B	

①●倭国産の銅鋺　②蛍光Ｘ線分析値は少数点１位で四捨五入　③鉛産地領域は，Ａ＝中国北部，Ｂ＝中国中・南部，Ｃ＝日本，Ｄ・Ｄ’＝韓国

あるとする［持田2012］。ただし，荒神西古墳は7世紀中葉とするが，7世紀前半のスタンダードな型式であり，メイン器種のＡⅠ類杯・Ⅱ類鋺の国産化も6世紀末と私考する。

列島における銅製品の国産化については，出雲市上塩冶築山（かみえんやつきやま）古墳（6世紀末）の銅鈴などが北接する平田市後野鉱山の鉛鉱石と同値とする馬淵の所見がつとに提示されている［馬淵1987］。出雲地域の資料を追試分析した齋藤も，出雲市中村1号墳出土杏葉などの馬具類にもC領域に帰属する分があるとして，6世紀末～7世紀初説に肯定的である［齋藤2019］。また亀田修一は，7世紀前半の工房から銅鉱石が出土した山口県美祢市国定遺跡で新羅陶器が伴出し，北九州でも「新羅国神」を祀り，大宰府へ銅原料を備進した可能性が高い福岡・香春岳（かわらだけ）鉱山周辺の新羅系瓦を出土する天台寺，東麓臨海地の豊前国上毛郡多布郷塔里（大宝2年戸籍）の新羅系渡来人集団の存在に注目し，7世紀の銅ないし梵鐘をはじめとする銅製品の生産に参画した新羅系工人の活動を重視している［2010］。

ここであらためて銅鋺の鉛同位体分析のデータを概観すると，A領域（華北）は比較的少なく，D・D2領域（韓国，D2は加耶・新羅）とB領域（華中・華南）の境界域が大半を占める。この傾向は，倭国の7世紀を中心とする古墳出土の武器・馬具・服飾品でも同じい［齋藤2010・19］。これにさきのB領域とD領域のデータが重なり，韓国の三国時代の古墳出土品の測定値がD・D2領域に帰属することが確認されるにつれて，倭国出土品で占める半島産原料の量比が主体を占めると予想されるものの，なお確定できないのが現状といえる。史料に現れる倭国の銅鉱山の開発は，7世紀末（天武・持統朝）から本格化すると考えられるので［小葉田1986］，以前は半島と定量の大陸産原料に依存していたことを示すとしてよいであろう。また銅鋺の二元系，三元系の問題は，おおむね三元系だが，7世紀前半代にも群馬・富士山1号墳（3-6）の二元系があってばらつきがある。諫早は，新羅では遅くとも7世紀末には二元系の銅鋺が存在すると指摘しており［諫早2021・125頁］，倭国でいつ佐波理の国産化が達成されたのかも今後の課題である。

ところで，上記の半島ないし大陸産原料の倭国への搬入については，欽明元（540）年「任那官家」（金官加耶）の新羅投降以後の新羅の倭国懐柔策であり，倭国サイドでは「東夷の小帝国」を演出する外交儀礼である新羅・任那の「調」が論じられてきた。関係史料は欽明21（560）年から始まり，6世紀末～7世紀前半に盛行したと伝える。調の内容は，金銀・綾錦・薬料などの奢侈財とともに「鏤金器（こがねのうつわもの）」（朱鳥元（686）年4月丁丑条）がみえ，飾大刀・馬具・服飾具が含まれるとみられる。また，銅のインゴットが搬入されたことは，7世紀末の史料（天武紀10（681）年10月丙寅朔条，持統紀2（688）年2月辛卯条）に錦絹・獣皮・鳥・馬などとともに「金・銀・銅・鉄」の献上がみえるが，原料の採掘が進展した7世紀末はともかく，以前は外交儀礼に伴う原料だけで充足されたかは疑問である。飾大刀・飾馬具に銅鋺を加えた金・銀・銅製品の国産化に要する中国産原料を含む半島列国からの調達は，別途交易物として移入されたのではないだろうか。

いうまでもないが，蛍光X線，鉛同位体分析はいずれも銅鋺の原材産地についての理化学分析の情報である。砒素の数値が目立って高い3例は国産の原材を用いた国産品と判定できるが，数値が低くても群馬・観音塚古墳のＡⅠ類杯のように，型式的所見によって国産品とみてよい例もある。鋺C・Dについては，型式的検討の結果をふまえていえば，7世紀前半代の鋺Cは，半島の比較資料が乏しく，国産品は3例にすぎないが，大部分は原材産地が半島・大陸の国産品とみている。7

世紀後半代の鋺Ｄについても，主体をなす器体が直立ぎみのDb類タイプ（5-25）は，新羅・皇龍寺木塔心礎下部出土鋺（27）と同型式だが，半球形に開く同寺や同･四天王寺西塔出土タイプ（28）は，特徴が類似する群馬・白山古墳とＤⅢ類（尖底鋺）の２例（3-76・77）以外に倭国で出土していないので，全体に新羅製品をモデルにした国産品と推定する。正倉院宝物の佐波理鋺の大半は「買新羅物解」（752年）によって新羅からの舶載品とされる［東野1974］が，上記の考古学，理化学分析の所見から，７世紀以来新羅製品の移入が継続してきた［諫早2021］のでなく，８世紀中葉以降に活発化する日羅交易［村井2021ほか］によってもたらされたと考えたい。

（3）模倣土器

７世紀初め，倭国の宮都に出現する銅鋺モデルの土師器供膳器の「金属器志向」に関する西弘海の論考［1978・82］は，古代前期の食器制を規定したいわゆる「律令的土器様式」論の原点として，以後の供膳食器研究に大きな影響力をもち続けている［高橋1999，巽2004，小田2016ほか］。西は研磨・暗文手法を多用した土師器杯Ｃの原型を初現的な鋺Ｃに求めたが，器形・指数（高径指数約40）・法量の一致は，指摘の正しさを裏付けている。さらに，模倣土器にも言及し，ＡⅠ類杯の直模品が飛鳥小墾田宮推定地（古宮遺跡）（6-25），ＢⅠ類鋺をモデルにした須恵器鋺が埼玉・柏崎４号墳（7-48）から出土しているとした。なお，杯Ｃについては，口端内削ぎの器形から，飲器とする見解があり［巽2004・40頁］，出土量も漸移的に増加するようで，具体的なデータは提示されていないが，河内南部（柏原市・羽曳野市付近）で渡来系集団によって先行して案出されたとする推考［林部1993］がある。

桜岡正信・神谷佳明［1998］は，出土数が全国最多の上野の銅鋺を集成するとともに，模倣須恵器は７世紀初から存在するが散発的で，仏器の補完用とみられるのに対し，在来の須恵器模倣の土師器坏が杯Ｃタイプの暗文土師器に転換するのは７世紀後半以降とし，地域の模倣土器研究に先鞭をつけた。関東の模倣土師器・須恵器の研究は，鶴間正昭［2004ほか］によって深化される。杯Ｃモデルの〝新型土師器杯〟は南関東は希薄で，北関東で流布するが，西部（上野・上総）はやや早く，器形・技法もかなり忠実なのに対し，東部（下野・下総）は規範がゆるく，改新後の政権の東国経営策の反映とみる。北関東の模倣土師器は，官的遺跡と一般村落では量差があるとされるが，模倣対象が坏だけでなく，有蓋台坏・鉢・高坏など多器種にわたり金属器志向が認められるのは，銅鋺配布の東国偏向の政治的意図に通じるものがあり，その影響力が立評を契機とする地方官衙を中心にまだらに定着するのが大化以後である［田中1991，長谷川1991ほか］ところに，東国社会の構造的特質が端的に示されていよう。

その後，関東を中心とする模倣土器に関説した論考は少なくないが，桃崎祐輔の要説［2006］に譲り，銅鋺の国産化と模倣土器の出現過程の論述から，模倣土器研究の論点を探ってみる。銅鋺の国産化をめぐる問題は前述したが，模倣土器の始源は東・西日本で大差なく，遅くともTK209期には認められるが，東国の出土例は少なく，銅鋺の補完品として有勢者から須恵器窯へ特注されたとする。私見では，銅鋺の政策的配布と金属食器の普及は別次元と考えるが，有勢者個々の模倣でなく，模倣土器も推古朝前後の政権による意図的な産物とみる（後述）。

さらに桃崎は，西国の銅鋺は７世紀以降，官衙・寺院の公器として伝世される一方で，模倣須恵

器は北九州のように古墳に定数副葬される地域性を指摘する。そして，全体に直模は少なく，模倣須恵器の再模倣が多いとするが，模倣土器の器種，型式分類，使用主体，生産と流通など多くの課題が残っている。なお，銅鋺の国産化を7世紀初とするため，模倣須恵器の始源年代は610年ころとするが，前記のごとく陶邑窯ではTK43期に確認できるので訂正を要しよう。

これまでの論考が，模倣土器のモデルを銅鋺に求めたのに対し，北九州の半島系土器を悉皆調査した寺井誠は，藤川智之の模倣土器は半島系土器の模倣とする説［1993］を継承・発展させた［2012］。それによれば，半島から北九州への土器の移入は，6世紀後半から新羅土器が急増して7世紀前半に及び，後半には大半を新羅土器が占めるという。器種は，陶質土器の台埦，埦，高坏，各種壺甕など多様である。日羅交渉については前述したが，北九州の有力首長は磐井の乱（527年）のさい新羅と結託し，6世紀後半の新羅の台頭に連動する民貿易の展開は首肯できる。また交流の実態も，モノ・技の流入にとどまらず，筑前・牛頸窯周辺地でのオンドル住居の検出や煙突形土器，有溝把手付甑などの古墳・集落での出土から，人の移動を伴ったことが知られている［亀田2008］。

北九州における模倣須恵器の生産は，陶邑窯につぐ牛頸窯（6世紀中葉～9世紀前半，300基超）［舟山2008，石木2012ほか］と豊前・天観寺山窯（寺井はふれないが筑後・八女窯［木村2013など］）で定数製作されている。寺井は，とくに半島系の有台鋺の消長に注目し，6世紀末～7世紀代を通して生産され，陶邑窯でも少数見出せるが出現時期が遅れるとして，北九州→陶邑窯の伝播も考えられるとする。寺井の見解は綿密なデータ操作によっているが，筑紫や肥後の主として古墳・横穴墳から出土する供膳器の主要器種は，TK43期に出現する深身の丸鋺（8-36・37）で，反（かえ）り蓋を伴う個体は少ないものの，有台埦はごく少数である［大野城市教委2008，熊本市教委2002ほか］。なお，有台埦は半島と北九州の交流の産物としてもよいが，飛鳥でもTK43期直前には存在している（6-45）。このほか，新羅土器のスタイルが，北九州を媒体し陶邑窯にとりこまれ関東まで波及した事例として，台埦や高坏にみられる台脚端が反転する特徴的な器形が新羅土器にある（8-20・35）。陶邑窯で知られる高坏は7世紀後半の窯跡（TG64A）だが，陶邑窯陶工の巡回窯とされる武蔵・小山窯（7世紀末，7-37）でも高坏が製作されている［鶴間1996］。

このようにみてくると，北九州の諸窯とくに牛頸窯を介し，主として新羅系土器の器種や型式が陶邑窯へ移入されたとみられるものの，模倣須恵器の器種組成のフレームは，陶邑窯から6世紀末前後に成立する地方窯へ一元的に発信される伝播システムが実在したと考えられよう。詳説はひかえるが，たとえばTK43期の陶邑窯で出現するＡⅠ類杯の模倣須恵器（7-2）は，TK209期に直方体の坏身に定型化され（7-3），関東を含む全国的に伝播する（6-5・41・50・52，7-48）。また，同じくTK43期に定型化される長頸瓶の有段台脚部（7-15）も，陶邑スタイルとして，近畿（8-39），北陸（6-5），東海（6-31）などの台脚坏・埦として列島規模で流布している。寺井は，ＢⅠ類モデル埦とする須恵器（6-37～41）を通有の有台埦に含め，渡来人の移住から周辺窯へ波及したと思われる半島系土器模倣須恵器と同一レベルで論じたため，模倣土器の意義が不明瞭になったように思われる。もっとも，模倣須恵器の多様な身部と台部のとり合わせを，厳密な型式として系譜別に整理するのは難しく，今後の検討に期待したい。

ここで，模倣須恵器の性格を探索する一助として，やや特殊な事例をとり上げよう。一つは，桃崎が注目した福岡県みやこ町箕田丸山古墳の銅鋺は希少なＪ類外反台鉢（4-7）で，原型は6世紀

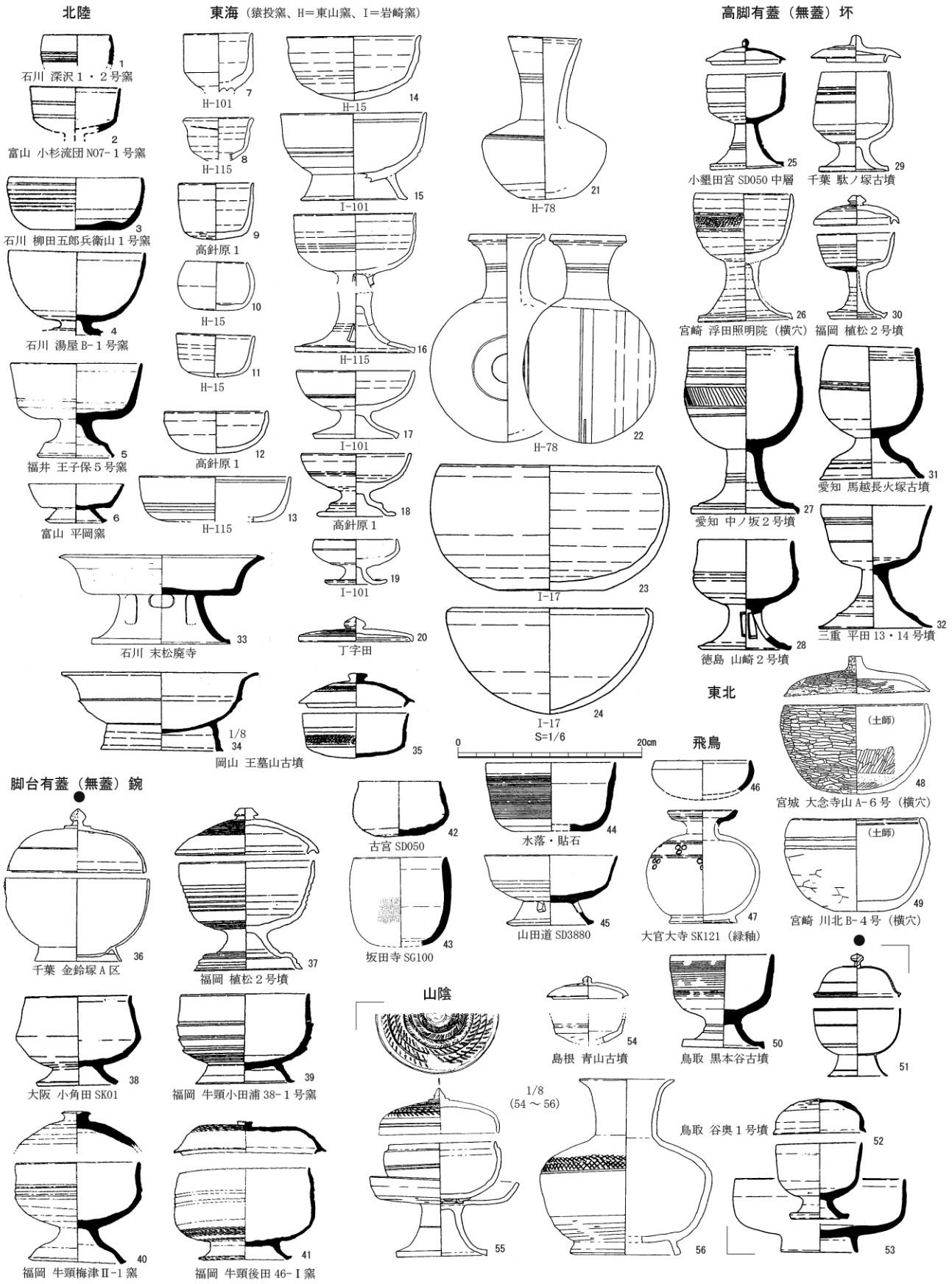

北陸
東海（猿投窯、H＝東山窯、I＝岩崎窯）
高脚有蓋（無蓋）坏
石川 深沢１・２号窯
富山 小杉流団 N07-１号窯
石川 柳田五郎兵衛山１号窯
石川 湯屋 B-１号窯
福井 王子保５号窯
富山 平岡窯
石川 末松廃寺
岡山 王墓山古墳
H-101
H-115
高針原１
H-15
H-115
高針原１
H-15
I-101
H-15
I-101
H-115
I-101
高針原１
I-101
丁字田
H-78
H-78
I-17
I-17
S=1/6
0
20cm
小墨田宮 SD050 中層
千葉 駄ノ塚古墳
宮崎 浮田照明院（横穴）
福岡 植松２号墳
愛知 中ノ坂２号墳
愛知 馬越長火塚古墳
徳島 山崎２号墳
三重 平田 13・14 号墳
東北
飛鳥
（土師）
宮城 大念寺山 A-６号（横穴）
（土師）
宮崎 川北 B-４号（横穴）
脚台有蓋（無蓋）鋺
千葉 金鈴塚 A 区
福岡 植松２号墳
古宮 SD050
坂田寺 SG100
水落・貼石
山田道 SD3880
大宮大寺 SK121（緑釉）
大阪 小角田 SK01
福岡 牛頸小田浦 38-１号窯
山陰
島根 青山古墳
鳥取 黒本谷古墳
鳥取 谷奥１号墳
1/8
(54 ～ 56)
福岡 牛頸梅津Ⅱ-１窯
福岡 牛頸後田 46-Ⅰ窯

図６　胴鋺模倣土器(1)

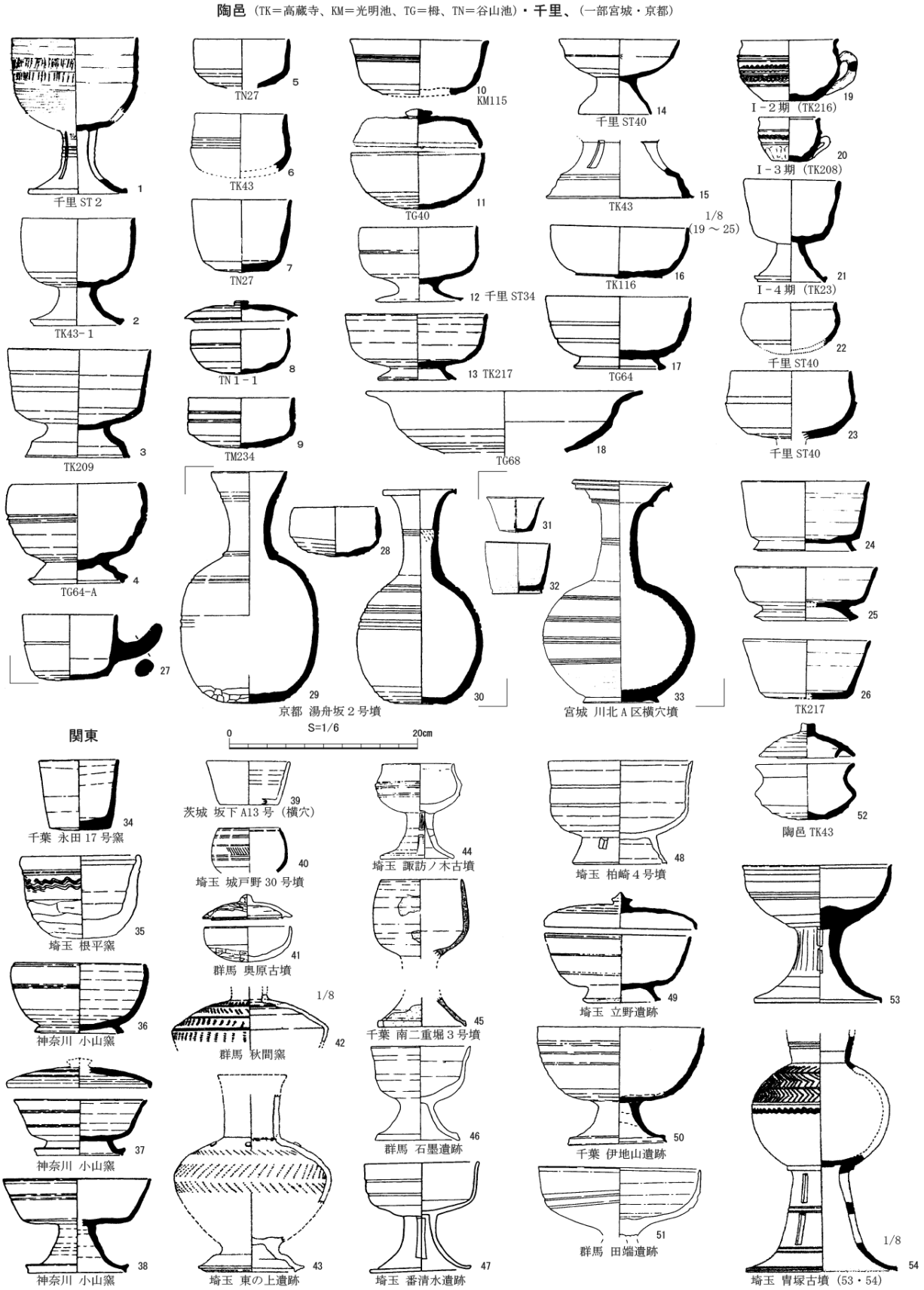

陶邑（TK＝高蔵寺、KM＝光明池、TG＝栂、TN＝谷山池）・千里、（一部宮城・京都）
千里 ST 2
TN27
TK43
TN27
TK43-1
TN 1 - 1
TM234
TK209
TG64-A
KM115
TG40
12 千里 ST34
13 TK217
TG68
千里 ST40
TK43
TK116
TG64
I - 2 期（TK216）
I - 3 期（TK208）
I - 4 期（TK23）
千里 ST40
千里 ST40
TK217
京都 湯舟坂 2 号墳
S=1/6
0
20cm
宮城 川北 A 区横穴墳
関東
千葉 永田 17 号窯
埼玉 根平窯
神奈川 小山窯
神奈川 小山窯
神奈川 小山窯
茨城 坂下 A13 号（横穴）
埼玉 城戸野 30 号墳
群馬 奥原古墳
群馬 秋間窯
埼玉 東の上遺跡
埼玉 諏訪ノ木古墳
千葉 南二重堀 3 号墳
群馬 石墨遺跡
埼玉 番清水遺跡
埼玉 柏崎 4 号墳
埼玉 立野遺跡
千葉 伊地山遺跡
群馬 田端遺跡
陶邑 TK43
埼玉 胄塚古墳（53・54）
1/8
(19 ～ 25)

図７　胴鋺模倣土器（2）

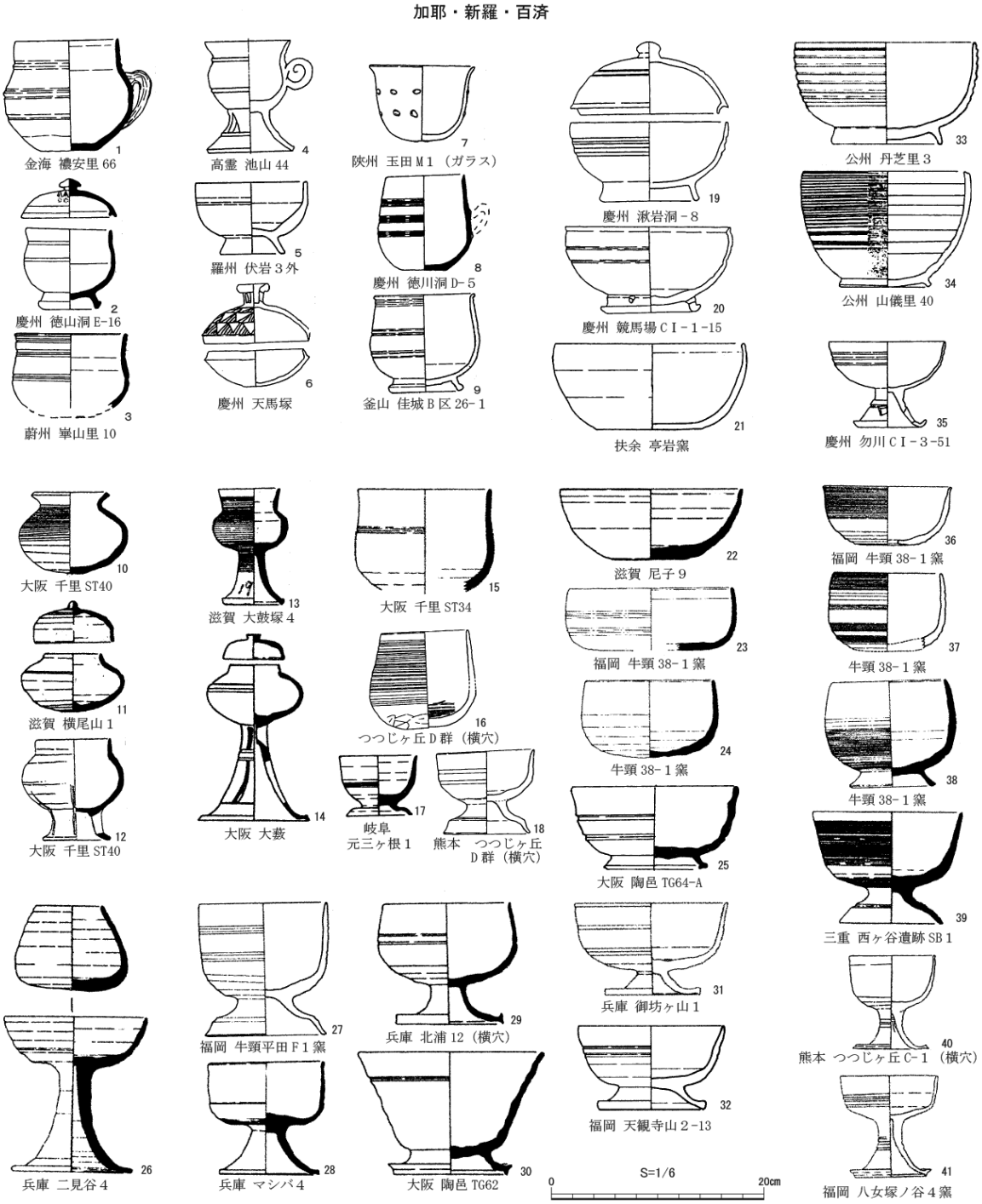


図８　韓半島列国と倭国の胴鋺模倣土器と小型短頸壺

図２～８の出典：古代の土器研 1998，奈文研・歴史土器研 2019，毛利光 2004・05，桃崎 2000，愛知県 2015，石考研・北陸古代土器研 1988，大崎市 2009，大野城市教委 2008，熊本市教委 2002，江津市教委 2003，鳥取県 2020，桜岡・神谷 1998，塩野 2004，鶴間 2004，寺井 2012，藤川 1993，小栗 2003

代の北朝（北魏・北斉）墓の明器にみられ［桃崎2020・第4図］，私見は隋帝国との外交に伴う賓礼の宴器の一種と推定する。模倣須恵器は，大阪・陶器遺跡，陶邑窯TG68号窯（7-18），備中で卓越した首長墳王墓山古墳（6-34）［間壁・山本・三木1974］で出土し，牛頸窯では未認だが，大形大壁建物が所在し軟質土器・新羅土器が出土する大野城市薬師森遺跡から複数の模倣須恵器が出土している［上田2022］。分布をトレースすると，推古朝前後の政権が王民化策を進める北九州や瀬戸内で，北朝系の文物を受容するような地域支配の拠点が浮上する。もう一つは，改新後の政権の段階で，地域の特産品を特注した例である。尾張・猿投窯は，一見旧守的で供膳器の法量分化も発達しないが，高品質の須恵器から灰釉陶器を生み出した。法隆寺献納宝物の銅鋺（5-30）にみる高貴性を写した有段蓋埦の製作は，尾北・篠岡窯も加わり，もっぱら宮都で8世紀前半まで宴器？として用いられた［城ヶ谷1999］。

なお，私見で銅鋺の基本的な器種組成を，杯（酒杯）＋鋺（飯鋺）＋瓶（酒瓶）とし，模倣須恵器もこれに準ずるとした。酒瓶は古墳の喪葬儀礼の必需品だが，西国でも金属杯・鋺とセットをなすのは陶製品である。たとえば，鳥取・谷奥1号墳（7世紀第Ⅱ四半期）で，ＡⅡ類高足杯（6-51）とこれを写した陶邑タイプの無鈕有蓋台坏に，内底に磨滅痕をとどめる承盤一式（6-52・53）（二世代で分有？）に，時期差が看取される一対の台脚長頸瓶を伴う［鳥取県2020］。また，島根・青山古墳でも，須恵器のＡⅠ類坏（6-54），類例のまれな高坏に有蓋丸埦（6-55），印花文陶器の刺突点線に近似する加飾を施した独特の長頸瓶（6-56）の大形3点セットの特注品によく示されている。模倣須恵器の3点セットは各地でみられ（7-28～30，31～33），それぞれ趣向を凝らしている。

関東も例外でなく，埼玉・胄塚古墳（7-54）の体部・台脚を文様，透し孔で飾るのは顕著な事例であり，東海道武蔵支路の駅家関連施設として知られる埼玉・東（あづまの）の上（うえ）遺跡例（7-43）も，儀礼用の酒瓶への強い思い入れがうかがえよう。また，石室での出土状態も，藤原学が新たな葬礼として注視したように［1985］，静岡・賤機山古墳（TK43期）で石棺の前にペアの台脚長頸瓶を並置する［斎藤1961］など，死者へ酒瓶を供献する事例は珍しくない。6世紀前半代に各種器台・壺類や装飾須恵器［山田1989・92，柴垣2003・87～88頁］が，石室内の喪葬儀礼ではたした役割りを，6世紀後半～7世紀代には台脚長頸瓶が代替するようになったとしてよいであろう。遠江・湖西窯のフラスコ形長頸瓶の関東・東北の広域にわたる喪葬器としての流通［後藤2015］については，多言を用しまい。

ここまで模倣土器に関する拙文は，資料の収集・整理が不備のまま多くの課題を残す記述となり，とくに地方の土師器の模倣についてはほとんど言及できなかったが，留意点を以下にまとめる。

Ａ　土器の「金属器志向」は，①TK43期に，銅鋺ＡⅠ・Ⅱ類杯（酒杯）＋少数のＢⅠ類鋺（飯鋺）を最高位，Ｃ類鋺（飯鋺）大・中・小を法量による格差を付与し創出・配布。TK209古期（600年ころ）に鋺Ｃ大鋺をモデルに土師器杯Ｃが宮都で出現，以後須恵器杯Ｇとともに段階的に普及。

②飛鳥Ⅰ期に，古墳中期以来の須恵器杯Ｈ主体の供膳食器刷新のため，ＡⅠ類杯モデル［西1978］の杯Ｇ（7-8）が登場。内山敏行は，ＡⅠ類の高脚を取った丸底杯に反り蓋を被せ定型化したとする［1997］。この食器形態の改変を，古墳中期以来の手持ち（底持ち）食法の伝習保持のためとし，蓋・身を飯・汁・菜兼用だった用法を止め，宮廷食器のスタイルに仕上げたのが杯Ｇとする卓見を示した。そのばあい，北九州をはじめ西日本の各地での蓋が少なく深身の丸鋺主体の組

成を杯Ｇの地域的アレンジとすると，底持ち食法と銅鋺により忠実な器種となり，食法・食器の伝習性が根強い地方と評価できるのか検討を要しよう。東日本で在来の須恵器模倣土師器が杯Ｇ系に更新されるのは，7 世紀後半とみられる。

なお，内山は宮都で手持ち食法が器の底持ちから現代に通じる上下持ちへ移行するのは，箸食が官人に普及する 8 世紀以降とするが，宮都の杯Ｇは平底に近く，後続する須恵器杯Ａ・B，土師器杯Ｃもほどなく平底化（置食器示向）するので，飛鳥Ⅰ新期のうちに上下持ち食法に変っていたのではなかろうか。7 世紀代の匙・箸の出土例は少ない［内山 1997・第 4 表，亀田 2014，茅ヶ崎市教委 2013］が，隋答使来日（608 年）などでの金属宴器が，銅鋺と同じ威信財として古墳に副葬されるところに，列島における銅器受容の特質が反映されているように思う。

B　①銅鋺模倣須恵器は TK43 期のうちに陶邑窯で始源し，忠実な仿製品（6-25）をさきの陶邑タイプ（7-3・24～26）のように改変された情報が，各地の地方窯へ一元的に発信された。地方窯から陶邑窯へ伝播したとみられる半島（新羅）系陶質土器の器種，型式もあるが，陶邑窯では通有の有台鋺（7-17）だけでなく半島独自の平台鋺（7-16）もみられ，陶邑タイプの各種丸鋺系高坏（6-16～19，7-14）も製作され流布した。

②模倣須恵器の器種の分布は，ＡⅠ・Ⅱ類杯系が定数，広域，ＢⅠ類鋺系が少数，点在（北九州は顕在），Ｃ類鋺はＡⅠ類と一体化し杯Ｇとして定型化。供膳食器の主要器種として，全国で画一的に普及（各地で型式アレンジ）。小杯の銅製は倭国では例外的，半島では定数あり有台が普通（8-2・5・9）。倭国の模倣須恵器坏は各種あり，各地で原則無台小坏を定数生産・流通（6-9～11，42・43，7-6・7 ほか）。

③メイン器種であるＡⅠ・Ⅱ類，ＢⅠ類とその模倣須恵器は，ともに 7 世紀中葉ころほぼ一斉に消失し，模倣須恵器が銅鋺に準ずる社会性をもつことを示唆。銅鋺の性格は，「東夷の小帝国」の外交理念をシンボリックに体現する宴器と考えるが，模倣須恵器の性格の解明には，なお使用主体（階層），公的・民的施設での出土状況，地域性などの解明が必要である。

C　大勢として，模倣須恵器は畿内政権＝陶邑窯が情報を管理・発信していたとみられる。そう理解してよければ，地方窯への器種を特定した情報提供の意図は，金銀器・ガラス（舶載）－銅器・漆器－施釉陶器（舶載）－模倣須恵器－須恵器・土師器といった階層的な食器制定立プランにもとづく施策の一環だったのではなかろうか。その意味で推古朝の内治・外交に関わる儀礼の整備として，冠位制（603 年）［若月 1991 ほか］，衣服制［武田 1986］の制定にも関わる課題といえよう。

（4）模倣須恵器と喪送儀礼

ここまで，模倣須恵器の型式的検討を通して，6 世紀末～7 世紀前半の陶邑窯が半島系金属器の器種を受容しつつ銅鋺模倣須恵器を製作し，地方窯再編の動向に合わせ，情報を一元的に提供する伝播システムを形成したと述べた。当該期は，6 世紀中葉に発する群集墳の展開に伴い須恵器の需要が急増したが，その多くが横穴式石室の普及と古墳の喪送儀礼の刷新が重なる祭式須恵器（儀器）［藤原 1985・97］であった。以下，儀礼の場での出土状態および祭式須恵器の器種組成を概観し，模倣須恵器の性格の一端にふれてみたい。

黄泉国の他界観にもとづく古墳の喪葬儀礼は，一般に①殯，②葬送，③墓前，④追善，⑤禊の手

順で執行されたと考えられている［大場1971，和田1969ほか］。このうち①は文献史学，③は考古学的知見で実態がほぼ把握できるが，②は殯の参会者が古墳の外で共飲食したと推定されているものの，内実が不分明である。また，周知のイザナギノミコトの黄泉国訪問譚については，③横穴式石室を喪送空間と連想する通説に，①とする異論もあり［辰巳2006・227頁］，黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）［小林1949］，事戸度（コトドワタシ）（死者との別離宣言）［白石1975］の解釈や場についても再検討の余地がありそうだ［寺前2006ほか］。そのため，たとえば6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室の袖に数十点単位の須恵器が片付け（配置）される（奈良・藤ノ木古墳など）説明として，手挟な石室内での儀礼執行に否定的で，②などで行われた共飲食儀礼の食器が搬入されたとする見解がある［森本2012］。

ここで，横穴式石室導入後の須恵器を用いた古墳祭祀の変遷を要約しよう。**Ⅰ期**　5世紀後半：墳頂，墳裾の埴輪列と一体的に各種器台と壺・瑞・高坏などに大甕を加えた境界祭祀が中心で，石室内の棺内・棺側の蓋坏・高坏などは少数（大阪・高井田山古墳など）。**Ⅱ期**　6世紀前半：墳頂・墳裾・周溝祭祀とともに，石室内の棺前に各種器台を中心に据え，多数の有蓋高坏ないし蓋坏主体の須恵器を整然と配置する飲食供献儀礼を執行（群馬・前二子塚古墳など）。**Ⅲ期**　6世紀後半～7世紀前半：前方後円墳と埴輪祭祀の停止とともに，墳頂・墳裾・周溝祭祀は全般に衰退するが，西毛野のように大甕祭祀として存続する地域もある［佐藤2019］。石室内祭祀も形式化がすすみ，器台に代り台脚長頸瓶がメイン器種となり，特定多数の器種あるいは大甕中心の組成を古墳（群）ごとにとり合せ，一括石室の袖や羨道（閉塞）に埋置（京都・湯舟坂2号墳など）。

なお，全期間を通し墳頂と羨道・前庭祭祀でとくに大甕の破砕例が多いのは，死者の現世への復活を封じこめる呪儀とみられるが，石室内に配置された須恵器の破砕は原則なく，石室空間は黄泉国での飲食供献ないし共飲食儀礼を演示する場と認識されていたとみられる。さきの森本の見解は，儀礼の変遷を十分考慮せず同質視したことから生じた誤解で，今後場と須恵器の組成の段階的な相互関係の分析による研究の進化を期待したい。

ところで，Ⅱ期を代表する前二子塚古墳（後円・94 m，MT15期）は，アーネスト・サトウの石室内墓前儀礼の復元図［土生田1996］（図9上）で知られる。死者の足元に，石室の主軸に沿って器台を中心に壺・瑞，儀礼での見ばえから脚部・頸部が長く伸びた高坏・瑞が2列に並立し，画一的な祭式須恵器セットが儀礼の荘厳感を可視化する役割りをはたしている。一対の高坏形器台には，Ⅱ期に現れる提瓶を乗せ，新器種の平瓶・横瓶とともに液体（酒・水）の貯器を重用する意識がうかがえる。この復元図でもう一つ注目されるのは，2列に並ぶ須恵器群の中央に，類例のない古墳前期以来の有段口縁壺に長脚を付けた土師器（高28.8 cm）［藤野2016］が据えられていることである。同じ使途が推察される須恵器短頸壺は大・小あり，脚付や有蓋のタイプもみられる（8-11～14）祭式須恵器セットの必需品で，陶邑窯始現期の大庭寺遺跡［酒井2002・第17図］で把手付小壺が確認でき，半島でも同一器種（8-4）が出土する。土師器小形丸底壺の消失と交代に現われるので［田嶋1988］，特殊な儀器としての機能を継承している可能性があろう。

古代王権と聖水（変若水（おちみず））供献儀礼については，淡路島の「瑞井」（真奈井）から難波の高津宮へ聖水を舟で運ぶ説話（『古事記』仁徳段）はじめ多くの伝承があるが，山本博は「もひ」（清澄な飲み水，水を盛る容器）の候補に角形把手埦（7-27），金属器模倣台埦（8-38）などを示す［1975・172頁］。角形把手付埦は，新羅・雁鴨池遺跡［韓国文化財管理局1993］で把手付（半欠）短頸平底中・

小壺（図９下）が出土しており，三国時代に遡る渡来系文物である。慶尚北道高霊池山洞古墳群（5世紀後半～6世紀中葉，図９下）［定森・白井 1992］をはじめ大加耶地域を中心に，少数だが同類の土器が出土しているという。列島では奈良・石光山古墳群［奈良県教委 1976］のように３点検出もあるが，出土は散発的である。石川県金沢市近郊の内灘砂丘や，島根県美保関砂丘［石川県 1923］など海浜祭祀での土師製品の発見が知られる。陶邑窯 TG68 号窯（TK48 期）の複線文を施した坏形深埦（9-下），京都・湯舟坂２号墳（7 世紀第Ⅱ四半期の追葬）［久美浜町教委 1983］の同形埦（7-27）からすると，儀礼Ⅲ期に祭儀・祭器のパターン化が進む中で，渡来系の新器種が旧守性を固守する畿内で土師器として受容されたのであろう。内灘砂丘出土の長く伸びる牛角状突起は，邪気を祓う祭器のイメージを伝える。そのことは，大和・大神神社拝殿奥の禁足地から，6 世紀以降とされる土師器・角形把手埦，台脚付短頸壺，子持勾玉（9下）がまとめて採取されている［古代出雲歴博 2015・15 頁］ことで明らかであろう。これら海浜・聖山信仰遺跡が王権ないし在地首長の聖水供献儀礼と接点をもつのかどうか，精査が要請される。

テーマから少々外れた記述になったが，角形把手埦に実在を考えにくい金属器模倣の目印である複線文を施すものが含まれる（図９下）ことは，模倣土器の流布が金属食器の普及を直接示さないという意味で，祭式土器＝儀器をあらためて認識させる。また，さきに森本徹が主張したように，須恵器多量副葬祭祀は，王権主導の畿内中枢部で横穴式石室を舞台とする制度的な規範を保持する

図９　上　横穴式石室の祭式須恵器，下　角形把手付土器と短頸壺

が，地方まで厳密な規範は及ばなかったとされる［2012］のは，模倣土器の地域での多様性に通じるものがあり，畿内政権の権力支配の限界を示唆しよう。

ところで，模倣須恵器の特色の一つに，銅鋺で例外的な各種の坏（6-9～11）をあげた。その理由は，ＡⅠ・Ⅱ類杯，ＢⅠ類鋺を配布された有力首長より下位の群集墳中の有力墳まで，①酒坏＋飯埦＋酒瓶の酒宴器セットが普及した（7-31～33）ことと関係しよう。祭式須恵器セットの器種組成は，儀礼Ⅱ・Ⅲ期では，①のほか，②威信器：各種器台→台脚長頸瓶＋短頸壺・坏，瓻，提瓶・平瓶などの貯蔵器，③食器：蓋杯・有蓋（無蓋）高杯，④境界器：大甕主体より構成される。墓前儀礼は石室（①②③）と石室外（墳丘）の墳頂・墳裾（Ⅰ・Ⅱ期②，③，④），渓道・前庭（③④）という大枠で画一化され施行された。

白石太一郎は，喪送儀礼は一族の系譜を回想する場でもあったとする［1975・367頁］が，食物供献あるいは聖水供献儀礼に供された酒宴器・威信器は，石室内における祭祀の荘厳性を可視化する服属儀礼的な儀式の中心器種であり，銅鋺模倣須恵器は主役ではなかったが，とくに金属食器を保有できない群集墳の有力世帯層の葬儀を演示する宗教的役割りを担ったと評価してよいであろう。

なお，酒宴器の「飯鋺」（銅鋺Ｃ類）の最古の国産品（TK43期）は，「盂」（5-14・15・37，供膳の水容器）がモデルかとした。口縁が内弯する器形は，飛鳥Ⅰ期の小ぶりな鉢形としても現れ，仏教文化の影響が強まるⅢ期以降仏鉢（鉄鉢形須恵器→銅・鉄器製品）として定型化され推移し（6-23・24）［堀2006］，器形の選定にあたり浄水信仰との関連を想定させる。そして，飯器の水信仰との関係といえば，奈良時代の飯器が形容詞化しつつも「水鋺」と呼ばれた［森川編2021］のは，食の文化史の一齣として興味深い。

註

（1）――拙文は，簡易な成稿を意図し，以下の省略用語を使用する。①便宜的に，金属器は「杯」，土器・陶磁器は「坏」と区別（飛鳥・藤原宮地域の土器は「杯」）。②銅鋺の加飾は，沈（凸）線文，条線文，弦文などの用例があるが，「複線文」に統一。③年代は，窯跡資料を基準に消費地の一括資料を加え，「TK43期」などと表記。④日本列島＝「列島」，韓半島＝「半島」，中国大陸＝「大陸」と略記。⑤法量は，器高×口径×底径（cm）。⑥文献の刊行年は，1978・1982→1978・82。⑦図の番号は，図1-1→1-1。

（2）――和泉・陶邑TK43-1号窯式は，銅鋺の初現年代の考定にとどまらず，集権国家示向を強めた推古朝前後の政権による国政改革の消長を，考古学的に検証するための鍵点となる窯式である。早くから飛鳥寺の創建年代（588年）とその下層出土須恵器の型式的検討が行われ，6世紀末の暦年代が考定された［田辺1981ほか］。その後畑中英二は，TK43-Ⅰ号窯の最終床面の一括に唐様式の蹄足円面硯が伴出するとして通説を批判し，7世紀代に下るとした［1999］。しかし，飛鳥地域の関連資料を再検討した西口壽生は，飛鳥寺西回廊基壇，豊浦寺講堂下層（692年）などの暦年をTK43期の下限とした［1999］。また佐藤隆も，TK43-Ⅰ号窯の未報告分に7世紀中葉～8世紀代の須恵器がみられ，問題の硯はそれに伴う混入の可能性が高いとし［2003・24頁，註7］，難波編年からもTK43期6世紀末説が裏付けられると論じている。以下本文では西口，佐藤の見解に従い，6世紀末の基準資料として「TK43期」と表記する。

（3）――西弘海以後の飛鳥編年と暦年代および器種名については，相原嘉之「Ⅰ 大和」「Ⅱ 飛鳥・藤原地域出土飛鳥時代土器実測図集成」『古代の土器5-1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会（1997），小田裕樹「古代宮都とその周辺の土器様相」『官衙・集落と土器2』奈良文化財研究所（2016）など参照。

（4）――桃崎より懇切なご教示と関連文献の提供を受けた。それによって，西アジアの金属・ガラス工芸の影響を受けた北朝系文物を体系的に詳論した矢部良明の文献

［1981・85］によって，成果を再認識した。また，その業績をふまえ，群馬・綿貫観音山古墳出土の北斉製水注を素材に，北東アジアにおける銅器生産の展開と背景を考察された未知の熊倉浩靖論文［1991］にも啓発された。ただ，熊倉が独自の銅器文化を創出した北朝の「たくましい自立性」［1991・360 頁］と，銅鋺が東国に偏在することを，6～7 世紀代に関東の大首長として君臨し後世まで「東国六腹朝臣」の盟主と目された上毛野君氏の在地支配力を重ね，倭国製銅鋺の倭王権による一元的配布を否定された［同上・365 頁］のには同調できない。

（5）――諫早は，皇龍寺木塔建立（643～646 年）とほぼ同時期に西金堂の基壇ごと改造されたという報告書の見解にもとづき，鎮壇具に用いられた無高台の素文鋺と有文鋺（①第 4 図 3），高台付鋺の素文鋺（第 4 図 9）と有文鋺（②第 5 図 2・3）の併存，埋納時期も同じとする［2021・125～126 頁］。しかし，皇龍寺の伽藍の整備・拡充は複数回にわたるとされ，型式的に一括資料とは考えにくく，埋納時期が異なるのか，伝世品を含むのか明らかでないものの，毛利光・桃崎も指摘するように，最低 2 型式にわたると考えられる。筆者図 2 で要説したように，器体が開くひとまわり小ぶりな鋺に先行する，大ぶりで深身の半球形を呈し高台が直な①，宝瓶鈕付の平笠形で高台がひよるタイプに先行して，宝珠鈕付の山笠形蓋を被る②は，7 世紀前半を下らない古型式である。また，素文鋺のグループでも，皇龍寺木塔出土で古相（第 4 図 1・2・5・6）と新相（4）の差異が看取され，新相は四天王寺西塔（679 年以前）出土の浅身の丸底鋺と同じ高径指数 36 を測る。

引用・参考文献

著者・論文

相原嘉之　1997「Ⅰ　大和」『古代の土器 5-1　7 世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会

東　潮・田中俊明　1988・89『韓国の古代遺跡　1，2　新羅篇，百済・加耶篇』中央公論社

荒井秀規　1994「「東国」とアヅマ」『古代東国の民衆と社会』名著出版

諫早直人・大江克己・金宇大・降幡順子・山口欧志・吉澤　悟　2012・14「群馬県白山古墳出土品の研究Ⅰ・Ⅱ」『鹿園雑集』19・21

諫早直人・降幡順子　2015・16「藤原宮・京出土の佐波理鋺」「平城宮・京出土の銅容器」『奈良文化財研究所紀要 2015・16』

諫早直人　2021「新羅の銅鋺」『日韓文化財論集』Ⅳ　奈良文化財研究所

諫早直人・岡田大雄・山口繁生　2022「4　京田辺市畑山古墳群出土遺物の再検討」『フィールド調査集報』8　京都府立大学歴史学科

石木秀啓　2012「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」『古文化談叢』67

石母田　正　1973『日本古代国家論』岩波書店

岩原　剛　2003「姫塚と段塚」『豊橋市美術博物館研究紀要』12

上田龍児　2022「集落・墳墓の動態からみた古墳時代後期の博多湾沿岸地域」『集落と古墳の動態Ⅲ』九州前方後円墳研究会

上原真人　2014『古代寺院の資産と経営』すいれん社

内田律雄　2006「黄泉の国の灯火」『季刊考古学 96　古墳時代の祭り』雄山閣

内山敏行　1997「手持食器考」『HOMINIDS』vol.1

　　2011「毛野地域における六世紀の渡来系文物」『季刊考古学・別冊 17　古墳時代毛野の実像』雄山閣

宇野隆夫　1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新」『日本考古学』7

江浦　洋　1994「海をわたった新羅の土器」『古代王権と交流』5　名著出版

江口　桂　2014『古代武蔵国府の成立と展開』同成社

大谷　徹　1991「北武蔵出土の銅鋺」『埼玉考古学論集　設立 10 周年記念論文集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

　　1996「常陸・八幡山古墳出土遺物の検討」『考古学の諸相　坂詰秀一先生還暦記念論文集』

大野延太郎　1931『土中の文化』春陽堂

大場磐雄　1971「葬制の変遷」『古代の日本』2　角川書店

岡村秀典　2015『中国中世青銅器の研究』科学研究費　基盤研究 B・中間報告書（2）

小栗明彦　2003「近畿地方古墳出土銅鋺と被葬者」『橿原考古学研究所論集』14　八木書店

小田富士雄　1979「古墳出土銅鋺について」『九州考古学研究　古墳時代篇』学生社（初出 1975）

小田富士雄・山口裕平・下原幸裕 2004「福岡県京都郡における二古墳の調査」『福岡大学考古学研究室研究調査報告』

小田裕樹　2016「古代宮都とその周辺の土器様相」『官衙・集落と土器』2　奈良文化財研究所

鏡山　猛　1959「福岡県粕屋郡花見古墳」『日本考古学年報』8
片山健太郎　2018「古墳時代の障泥とその系譜」『古文化談叢』81
亀田修一　2008「牛頸窯跡群と渡来人」『九州と東アジアの考古学　九州大学考古学研究室50周年記念論文集』上
　　2010「六　日本における銅製品の始まり」『国立歴史民俗博物館研究報告』158（齋藤・藤尾編・報告）
　　2014「福本70号墳の銅匙が語るもの」『福本70号墳発掘調査報告書』八頭町教育委員会
亀田　博　1977「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』23-4
瓦吹　堅・黒沢彰哉　1991「行方郡玉造町塚畑古墳出土の銅鋺について」『婆良岐考古』13
瓦吹　堅　1992「茨城の銅鋺について」『北茨城史檀』10
　　1998「茨城県内出土銅鋺の新資料」『婆良岐考古』20
木村龍生　2013「須恵器から見た地域間交流の一様相」『古墳時代の地域間交流1』九州前方後円墳研究会
金昡希　2010「五　三国時代の青銅容器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』158（齋藤・藤尾編・報告）
黒田裕一　1998「推古朝における「大国」意識」『国史学』165
熊倉浩靖　1991「王子形水瓶，東国古墳出土の意義と背景」『古代の日本と東アジア』小学館
小出義治　1950「千葉県印旛郡酒々井町新堀横穴第1号墳調査報告」『上代文化』19
後藤建一　2015『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
小葉田　淳　1986「日本鉱山史の研究」岩波書院
小林行雄　1949「黄泉戸喫」『考古学集刊』2
小宮まゆみ　1994「神奈川県出土の銅鋺と古墳文化の終末」『平成5年度　研究論文集』神奈川県私立中学高等学校協会
近藤義郎　1983『前方後円墳の時代』岩波書店
斎藤　忠　1961「埋葬の儀礼」『日本古墳の研究』吉川弘文館
齋藤　努・藤尾慎一郎編　2010「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』158
齋藤　努・中井　歩　2019「埼玉県内出土銅鋺の鉛同位体比分析について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 12
齋藤　努　2019「鉛同位体比からみた日韓青銅資料の原料の産地」『国立歴史民俗博物館研究報告』213
酒井清治　2002『古代関東の須恵器と瓦』同成社
桜岡正信・神谷佳明　1998「金属器模倣と金属器志向」『群馬県立埋蔵文化財調査事業団　研究紀要』15
笹川尚紀　2005「上毛野氏の外交・外征をめぐって」『古代文化』57-3
定森秀夫・吉井秀夫・内田好昭　1990「韓国慶尚南道晋州水精峯2号墳・玉峯7号墳出土遺物」『京都文化博物館研究紀要　朱雀』3
定森秀夫・白井克也　1992「韓國慶尚北道高霊池山洞古墳群出土遺物」『朱雀』5
佐藤　隆　2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』2
　　2020「7世紀における土器編年と暦年代論をめぐる難波と飛鳥の比較検討」『難波宮と古代都城』同成社
佐藤祐樹　2019「賤機山古墳の実相」『季刊考古学・別冊30　賤機山古墳と東国首長』雄山閣
佐藤　渉　2019「群集墳の大甕儀礼」『アーキオ・クレイオ』16　東京学芸大学
澤田秀実・持田大輔・白石　純　2009「津山油木北　殿田1号墳の研究」『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要』42-2
澤田秀実　2018「国産銅鉛原材料の産出地と使用開始時期」『青銅器の考古学と自然科学』朝倉書店
澤田秀実・齋藤　努・長柄毅一・持田大輔　2019「中国四国地方で出土した銅鋺からみた国産銅鉛原材料の産出地と使用開始時期」『国立歴史民俗博物館研究報告』213 （日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究）
塩野　博　2004『埼玉の古墳』（1～5巻）　さきたま出版会
重見　泰　2012『新羅土器からみた日本古代の国家形成」学生社
柴垣　勇夫　2003「第2・3節」（初出1984・98）『東海地域における古代中世窯業生産史の研究』真陽社
白井克也　2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器」『日本出土の舶載陶磁』東京国立博物館
白石太一郎　1975「ことどわたし考」『橿原考古学研究所論集　創立35周年記念』吉川弘文館
　　1985「8　年代決定論（二）」『岩波講座日本考古学』1
　　1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
　　1995「第2部　古代史のなかの藤ノ木古墳」『藤ノ木古墳』読売新聞社
城ヶ谷和広　1999「奈良前期の須恵器生産と金属器」『愛知県史研究』3
鈴木靖民　2012『倭国史の展開と東アジア』岩波書店

高田貫太　2014『古墳時代の日朝関係』吉川弘文館
高橋照彦　1999「律令的土器様式再考」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』
武田佐知子　1986「6　儀礼と衣服」『日本の古代　7　まつりごとの展開』中央公論社
田島　公　1986「4　外交と儀礼」『日本の古代　7　まつりごとの展開』中央公論社
田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
辰巳和弘　2006『新古代学の視点』小学館
巽　淳一郎　2004「古代前期の土器」『古代の官衙遺跡』Ⅱ　奈良文化財研究所
田中広明　1991「東国の在地産暗文土器」『埼玉考古学』28
田中史生　2015『国際交易の古代列島』角川書店
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
千賀　久　2003「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学Ⅲ　交流と交易』同成社
長　直信　2009「九州島における七世紀の須恵器」『終末期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
長　直信・中島　圭　2013「福岡県内出土の八女系須恵器について」『古墳時代の地域間交流 1』　九州前方後円墳研究会
都出比呂志　1991「日本古代の国家形成論序説」『日本史研究』343
鶴間正昭　1996「小出窯（多摩ニュータウン№342 遺跡 1 号窯）の成立をめぐって」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XV
　　2004「関東にみる新型土師器杯の出現」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集』XX
寺井　誠　2012「6・7 世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『九州における渡来人の受容と展開』九州前方後円墳研究会
寺前直人　2006「ヨモツヘグイ再考」『待兼山論叢』40（史学編）
東野治之　1974「鳥毛立女屏風下貼文書の研究」『史林』57-6
豊島直博　2014「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』98-3
中島恒次郎　1997「七世紀の食器」『古代の土器研究－律令的土器様式の東西 5　七世紀の土器－』古代の土器研究会
永嶋繁春　2014「銅鋺の非破壊分析結果」『佐倉市史　考古編』
中野政樹　1959「水瓶について」『MUSEUM』97
中村　浩　1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
長柄毅一・杉山秀宏・清水康二・三船温尚　2013「蛍光 X 線分析データからみた群馬県出土銅製品の製作方法」『FUSUS』5（アジア鋳造技術史学会誌）
西口壽生　1999「飛鳥地域の再開発直前の土器」『奈良国立文化財研究所年報』1999-Ⅱ
西　弘海　1978「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　奈良国立文化財研究所
　　1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』平凡社
長谷川厚　1991「東国における「律令的土器様式」の成立と展開について」『古代探叢』Ⅲ
畑中英二　1999「陶邑 TK43 号窯跡の年代観に関する再検討」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』
土生田純之　1996「葬送墓制の伝来をめぐって」『古代文化』48-1
　　1998『黄泉国の成立』学生社
　　2019「古墳時代上毛野における青銅製品の系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』213
原　明芳　1995「銅鋺考」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
林部　均　1986「東日本出土の畿内産土師器」『考古学雑誌』72-1
　　1993「第 3 章　聖徳太子時代の土器」『聖徳太子の時代』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
東　憲章・岡本武憲・柄本久子　2006「宮崎市日南市風田に所在する狐塚古墳の出土遺物」『宮崎県立西都原考古博物館　研究紀要』2
菱田哲郎　2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
平尾良光・榎本順子・早川泰弘　2000「風返稲荷山古墳出土資料の鉛同位体比」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
舟山守一　2008「Ⅴ　1　須恵器の編年，Ⅸ　総括」『牛頸窯跡群』
藤田奈美枝　1992「第Ⅲ章 3」『紀伊半島の文化史的研究　考古学編』清文堂
藤川智之　1993「古墳時代須恵器椀・台付椀の検討」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要　真朱』2

藤野一之　2016「藤岡でつくられた前二子古墳の須恵器」『大室古墳の教室　考古学講演会・講座の記録1』前橋市教育委員会
藤原　学　1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾　同記念会
1995「第3章　窯跡と出土須恵器（吹田窯跡群・図版）」『須恵器集成図録　2　近畿編Ⅱ』雄山閣出版
1997「高井田山古墳出土須恵器をめぐって」『河内古文化研究論集』和泉書院
古川　匠　2019『古墳時代の装飾馬具生産体制』雄山閣
堀　大介　2006「いわゆる鉄鉢形を呈した鉢について」『越前町文化財調査報告書』Ⅰ
間壁忠彦・山本雅靖・三木文雄　1974「王墓山古墳」『倉敷考古館研究集報』10　倉敷考古館
馬淵久夫　1987「第5節　鉛同位体比による原料産地推定」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
馬淵久夫・平尾良光　1987「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73-2
水野正好　1971「埴輪芸能論」『古代の日本』2　角川書店
宮代栄一　1986「古墳時代雲珠・辻金具の分類と変遷」『日本古代文化研究』3
村井章介　2021『東アジアのなかの日本文化』北海道大学出版会
毛利光俊彦　1978「古墳出土銅鋺の系譜」『考古学雑誌』64-1
1991「青銅製容器・ガラス容器」『古墳時代の研究　8　古墳Ⅱ』雄山閣出版
2004・05『古代東アジアの金属容器Ⅰ，Ⅱ　中国編，朝鮮・日本編」奈良文化財研究所
持田大輔　2012「6～7世紀の銅製品生産について」『奈良美術研究』13　早稲田大学奈良美術研究所
桃崎祐輔　2000「風返稲荷山古墳出土銅鋺の検討」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
2006「金属器模倣須恵器の出現とその意義」『筑波大学　先史学・考古学研究』17
2017「金属容器」『モノと技術の古代史　金属編』吉川弘文館
2019「遣隋使の考古学」『18歳からの歴史入門』彩流社
2020「Ⅸ　金鈴塚出土銅鋺の検討」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書2　考察編』木更津市教育委員会
森川　実編　2021『正倉院文書にみる古代食膳具の研究』奈良文化財研究所
森島康雄　2022「企画展「湯舟坂2号墳細見」から」『丹後郷土資料館調査だより』11
森本　徹　2012「儀礼からみた畿内横穴式石室の特質」『ヒストリア』235
安村俊二　2008『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂
山田邦和　1989「装飾付須恵器の分類と編年」『古代文化』41-8・9
1992「装飾付須恵器総覧」『古代学研究所研究紀要』2
矢部良明　1981「北朝陶磁の研究」『東京国立博物館紀要』16
1985「古墳時代後期の器皿にみる中国六朝器皿の影響」『MUSEUM』412
山本　博　1975『古代の製鉄』学生社
山元瞭平　2019「九州－肥後地域－」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会
山村信榮　1999「筑紫における7世紀土器編年と実年代の諸問題」『飛鳥･白鳳の瓦と土器』帝塚山大学考古学研究所･古代の土器研究会
横田義章　1989「銅鋺3例とその修復」『九州歴史資料館研究論集』14
吉村正親　1985「畑山1号墳出土の遺物」『京都考古』36
若狭　徹　2011「上毛野における五世紀の渡来人集団」『季刊考古学・別冊17　古墳時代毛野の実像』雄山閣
和田　萃　1969「殯の基礎的考察」『史林』52-5
若月義小　1991「冠位制の変遷と対外的契機」『古代文化』43

報告書・自治体史など

愛知県　2015『愛知県史　別編　窯業1　古代　猿投窯』
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　1988『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川県　1923『石川県史蹟名勝調査報告』壱
茨城県教育財団　2020『下河原崎高山古墳群2』
大崎市　2009「付録　川北横穴墓群第2次・第3次調査について」『岩出山町史　通史編上』
大阪府教育委員会　2006『陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ』
大野城市教育委員会　2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』
鹿島町　1982「第3章　古墳文化」『鹿島町史　資料編』上
霞ヶ浦町教育委員会　2000『風返稲荷山古墳』
柏原市教育委員会　1996『高井田山古墳』

春日居町　1988「第３編　第１章　五　古墳の年代」『春日居町誌』
木更津市教育委員会　2016「第３章　松面古墳」『塚の腰古墳・松面古墳発掘調査報告書』
熊本市教育委員会　2002『つつじヶ丘横穴群』
久美浜町教育委員会　1983『湯舟坂２号墳』
群馬県立歴史博物館　2021『綿貫観音山古墳のすべて』
江津市教育委員会　2003『青山古墳』
桑折町教育委員会　1994『錦木塚古墳発掘調査報告書』
古河市教育委員会・毛野考古学研究所　2020『久能向原古墳群』
古代の土器研究会　1997・98『7 世紀の土器　古代の土器 5-1・2』
埼玉県教育委員会　2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』
静岡県　1992「第４章　第２節 14 銅鋺」『静岡県史　2　資料編３　考古三』
島根県立古代出雲歴史博物館　2015『百八十神坐す出雲』
庄川町教育委員会　1988『植松古墳群』
正倉院事務所　1976 『正倉院の金工』
相馬市　2015「181　高松古墳群」『相馬市史　4　資料編Ⅰ　原始・古代』
高崎市教育委員会　1992『観音塚古墳調査報告書』
高崎市観音塚考古資料館　2022『地方から見た継体朝とその前後』
高松市教育委員会　2004『高松市指定史跡　久本古墳』
茅ヶ崎市教育委員会　2013『下寺尾官衙遺跡群の調査』
千葉県　1974「296　関向古墳」『千葉県の歴史　考古資料編３　古墳時代』
　　2002「22　鶴巻塚古墳」『千葉県古墳時代関係資料』1
東京国立博物館　1964 『法隆寺献納宝物目録』
　　1968～88『東京国立博物館図版目録　古墳時代遺物編』Ⅰ～Ⅴ
鳥取県　2020「第２章第２節　61　谷奥１号墳，74　黒本谷古墳」『新鳥取県史　古墳時代　考古 2』
名古屋市教育委員会　2005 『東二葉町遺跡　第３次発掘調査報告書』
奈良県教育委員会　1976 『葛城・石光山古墳群』（橿原考古学研究所編）
奈良文化財研究所・歴史土器研究会　2019『飛鳥時代の土器編年再考』
日光二荒山神社編　1963『日光男体山』
羽曳野市　1994 「古墳時代　奉献塔山古墳群」『羽曳野市史　第３巻　史料編 1』
藤枝市埋蔵文化財調査事務所　1980『日本住宅公団藤枝地区　埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ
富津市教育委員会　2013「14　亀塚古墳」『内裏塚古墳群総括報告書』
松本市教育委員会　1990『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』
山梨県　1998「第４章　古墳時代　208　稲荷塚古墳」『山梨県史　資料編１　原始・古代 1』
八女市教育委員会　1969・71『塚ノ谷窯跡群』『管の谷窯跡群』
外　国
文化財管理局文化財研究所　1984『皇龍寺遺蹟発掘調査報告書』1
大韓民國文化財管理局　1973『武寧王陵発掘調査報告書』三和出版社
　　1993『雁鴨池発掘調査報告書』学生社
湖南省博物館　1959「長沙両晋南朝隋墓発掘報告」『考古学報』1959 年３期
　　1960「長沙赤峰山２号唐墓簡介」『文物』1960 年３期
王克林　1979「北斉庫狄廻洛墓」『考古学報』1979 年３期
夏根林　2010「江蘇江都大橋窖蔵青銅器」『東南文化』2010 年第１期　南京博物院

（後記）

筆者の銅鋺調査は，半世紀以上前，石川県高畠経塚古墳出土品（3-15，東京国立博物館蔵）の実測にすぎない。デスクワークによる成稿にあたり，各地の施設・研究者の皆さんの格別のご支援に衷心よりお礼申しあげます。「銅鋺地名表」を予定の続稿に付けるため，ご芳名もそこで記さしていただきますので，ご寛容下さい。

（国立歴史民俗博物館名誉教授）
（2023 年３月 31 日受付，2023 年 11 月 30 日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 248 March 2023

The Study on the Type, Genealogy, and Imitation Earthenware of the Copper Bowls

YOSHIOKA Yasunobu

(l) The type classification and chronology of copper bowls were established by Toshihiko Morimitsu and Yusuke Momozaki. The copper bowl, which is the subject of this paper, has been regarded as the starting point of the preference for metal utensils that characterized the tableware system of the early antiquity. This paper examines the reconstruction of the classification and chronology of copper bowls based on their vessel shape and decoration. For that purpose, we collected all the examples of copper bowls excavated from all over the country, and tried to increase the objectivity of the data by classifying the size and indexing each part. In addition, preliminary work was carried out to approach the evaluation of the historical significance of copper bowls.

Copper bowls were classified into 10 categories. Most of them are made up of Wa Kingdom's original type AI/II high-stand cup, and BI type of high stand bowl and C and D type lidless bowl, which are common in the Korean Peninsula. These are basically symbol of sake bottles made of pottery with the Sake cup + rice bowl, and are considered prestige goods that demonstrate the diplomatic power of the Wa Kigdom. The type and structure of sake cups and tea bowls differed depending on the ranking of the local chief within the W a Kingdom. In the middle of the 7th century (Taika), the shapes and decorations of the vessels changed greatly, and the target of distribution from the W a Kingdom also extended to the lower classes.

(2) Earthenware imitating copper bowls was made in various places, and the preference for metalware spread. Although the types of imitation pottery seem to be diverse at first glance, it is assumed that there was a system in which the information that had been standardized at the Toyu kiln in Osaka was transmitted to the local kilns in an integrated manner. Similar to copper bowls, the AI/II and BI types of imitation earthenware disappeared in the middle of the 7th century, suggesting that there was an intention to stratify tableware in the same way as copper bowls.

(3) I summarized the results and points of discussion of physical and chemical analysis (lead isotopes, fluorescent X-ray analysis) of copper bowls. Although there are many problems, it is speculated that copper and lead as raw materials were imported from the Korean Peninsua and China, and copper bowls were produced in Wa Kingdom in the 7th century.

Key words: preference for metal utensils, categories, high tableware, 7th century (Taika), imitating copper bowls